

令和5年度 メディア芸術連携基盤等整備推進事業
分野別強化事業

メディアアート分野での
コミュニティネットワーク構築準備と
作品調査とデータ整備
実施報告書

特定非営利活動法人コミュニティデザイン協議会

令和6年2月

目次

第1章 事業概要	3
1.1 目的・背景	3
1.2 実施内容	3
1.2.1 メディアアート史を軸としたデータ収集とメディアアート史年表の活用 ..	3
1.2.1.1 メディアアート史年表とは	3
1.2.2 メディア芸術データベース登録情報の整備とデータ作成	4
1.2.3 ネットワーク構築のための準備作業	4
1.2.3.1 PMA (Platform for Media Art Production) とは	5
1.2.3.2 PMA の共有	5
1.3 実施体制	6
1.4 実施スケジュール	7
第2章 成果・課題・評価	8
2.1 実施結果・事実	8
2.1.1 メディアアート史を軸としたデータ収集とメディアアート史年表の活用 ..	8
2.1.1.1 データ収集の成果と課題	8
2.1.1.2 メディアアート史年表活用の成果と課題	9
2.1.2 データベース登録情報整備の成果と課題	9
2.1.2.1 データに関する課題	10
2.1.2.1 データ整備の今後	10
2.1.3 ネットワーク構築のための準備作業	10
2.1.3.1 PMA 試用バージョン	10
2.1.3.2 今年度以降の予定と目標	15

目次

2.2 成果、結果からの推測、課題	16
第3章 実施内容	17
3.1 事業企画会議	17
3.2 メディアアート史を軸としたデータ収集とメディアアート史年表の活用	18
3.2.1 オンラインミーティング	18
3.2.2 メディアアート史を軸としたデータ収集	20
3.2.3 メディアアート史年表更新作業	20
3.2.4 メディア芸術データベース API 活用検討	23
3.2.5 札幌国際芸術祭展示	24
3.3 データベース登録情報の整備	26
3.3.1 オンラインミーティング	26
3.3.2 過去データの精査と出典情報の追加	26
3.3.3 データベース整備作業	27
3.4 ネットワーク構築のための準備作業	32
3.4.1 オンラインミーティング	32
3.4.2 PMA の配布	33
3.4.3 PMA の使用法	37
3.4.4 ネットワーク構築に向けて	46
3.4.5 ネットワーク構築ヒアリング 1 : 廣田 ふみ (CCBT)	47
3.4.6 ネットワーク構築ヒアリング 1 : 黒澤 浩美 (金沢 21 世紀美術館)	48
3.4.7 ネットワーク構築ヒアリング 1 : 南条 史生 (N&A)	51

第1章 事業概要

1.1 目的・背景

文化庁では、我が国のメディア芸術の振興を企図して、それに関わる産・学・館（官）にまたがる関係機関等の連携・協力の推進、及び我が国でこれまで創造されてきたメディア芸術作品を保存・活用するために必要な基盤となる調査を行ってきた。

本事業では、メディア芸術のうちメディアアート分野にフォーカスし、メディアアート史年表を軸とした作品等の調査、メディア芸術データベース（以下、MADB）のデータ整備、メディアアート作品制作研究のためのプラットフォーム策定など、分野の振興、連携のためのツール作成、整備を行った。また、それらを未来へ継承していくために、有識者へのヒアリングを行い、関係者、関連団体のネットワーク化のための準備を行った。

1.2 実施内容

1.2.1 メディアアート史を軸としたデータ収集とメディアアート史年表の活用

本事業におけるメディアアート史を示すものとして制作し、内容を拡充しながらオンライン公開を続けてきたメディアアート史年表について、今年度の事業においては示している項目に関する令和4年度までの情報について調査を行い、データを作成した。得られたデータについては公開されている年表に反映、更新を行った。

また制作した年表の活用として札幌国際芸術祭2024での展示公開を行い、これに合わせてインターネット環境のない場所でのメディアアート史年表の閲覧を可能とするローカル環境用プログラムの開発も行った。

1.2.1.1 メディアアート史年表とは

メディアアート史年表は本事業の中で、日本における1950年から2022年までのメディアアートに関連した大きな流れの提示を目的として印刷版を制作、その後でウェブ版を構築し公開を続けている。

年表の内容は、プロジェクトに関わった方々の調査、集合知により構築されており、メディアアート史を確定するものではなく、メディアアートに関する学習や研究、議論など、認知拡大や理解促進を目的として暫定的に構築した。

年表は、時代とともに表現形態なども変化し、はっきりと定義しにくいメディアアートの多様性とその変遷を読み取るために、大きく五つのカテゴリーから構成されている。

- 1: フェスティバル／シリーズ
- 2: 施設／組織
- 3: グループ／アーティスト・コレクティブ

第1章 事業概要

- ・4: テレビ／ラジオ／インターネット（ネットワーク・ベースド）
- ・5: 高等教育機関／学会

万国博覧会、フェスティバル、展覧会やコンサートなどの出来事を軸にして、それを実施したグループや施設などを時間の流れの中に配置し、現在の日本のメディアアートへ受け継がれる文脈の表現を試み、メディアアートの学術的環境として、高等教育機関と学会、そして、そこに関わった人物も盛り込んでいる。

カテゴリーに収まらない単発的なイベントは開催場所とともに表記し、メディアアートの主要フェスティバルにおける受賞者名も示している。

- ・6: 単発的なイベント
 - ・7: 文化庁メディア芸術祭、アルス・エレクトロニカ・フェスティバルの日本人受賞者名
- また年表内の項目からは、該当する MADB 情報やアートスケープサイト用語解説、インターネット上の情報へのリンクも実装している。

1.2.2 メディア芸術データベース登録情報の整備とデータ作成

本事業において MADB 開発版のデータについて精査を行ってきた結果、現在の MADB で非公開となっているデータの中で、メディアアート分野として公開すべきデータが明らかになった。

今年度はここまでの作業により公開すべきデータでありながら間違いが発見されているデータなどを、出典に当たって正しいデータに直すとともに、その出典も正確に示す作業を行う。またこの出典に当たる作業により、出典から新たな掲載すべき作品などの情報が明らかになれば、その情報からのデータ作成も行った。

1.2.3 ネットワーク構築のための準備作業

本事業ではメディアアートに関係する組織のネットワーク構築の準備作業として、「メディアアート作品制作研究のためのプラットフォーム（PMA: Platform for Media Art Production）」の策定を行ってきた。昨年度の事業においては PMA の項目の精査や実際の作品に関するテスト入力のほか、データ入力のためのアプリケーション構築とテスト、入力されたデータを閲覧する閲覧サイトの表示例の提示などを行った。

今年度はメディアアートに関連する活動を行っている、若しくは情報や資料を持つ個人や団体（作家や学芸員、施設スタッフ、研究者等）に、PMA のコンセプトや設計における方針、実装した入力アプリケーション、閲覧サイト、今年度作成したテストデータを提示して、PMA やメディアアートのアーカイブについてだけでなく、ネットワーク構築に関するヒアリングを行った。

これらの作業を通じて、本事業の主目的であるメディアアートに関するネットワーク構築のための基盤構築準備について検討した。

第1章 事業概要

1.2.3.1 PMA (Platform for Media Art Production) とは

1990年代に日本とヨーロッパで同時多発的に生まれた（ニュー）メディアアートは、デジタル技術とアートに関する様々な実践と言説を生み出しただけでなく、インタラクティブアートやネットアートといった、今日のメディア芸術につながる、先駆的な活動でもあった。こうした文化的活動をアーカイブ化し、それを新たな芸術文化創作につなげていく活動を通じて、メディアアートに関する人的、施設のネットワークを構築する一つの基盤としていきたい。この基盤としてのネットワーク構築を通じて、より多くの人々がメディアアートについて知り、興味を持ってもらうだけでなく、それを、新たな作品をつくるという創作活動と、それに対する解説や批評といった言説につなげていく。知ること、わかること、つくること、分析すること、共有することは、それぞれを分けては考えられず、相互に関連しながら発展していく。この相乗効果が生まれて、初めて個々の要素が意味を持つようになる。これもまた、プロセスのネットワークであり、このもう一つのネットワークが、基盤としてのネットワークを機能させていくための原動力となる。

こうした複合的なネットワークによって支えられている文化活動を活性化していくためには、動的かつ空間的、相互作用的な当時のメディアアート作品を保存し、再展示可能な状態にしておくことが、まず何より必要である。そのためには、作品の写真や映像といった外観の資料だけでなく、テックライダーのような作品のハードウェア、ソフトウェア双方の構成や構造、インタラクションの機能や展示環境や設営や展示に関する資料などが保存されていて、それらがアクセス可能な形で公開されていなければならない。そうしておけば、資料の公開や利活用の促進により、メディアアートに関する関心や文化に対する好循環が生まれ得る。

こうした背景を基に、本事業においては、メディアアートという概念が生まれ、発展していった1990年代から2000年代のメディアアート作品のアーカイブとネットワーク構築に着目する。特に当時多くの作品がつけられた、インタラクティブなメディア・インスタレーションを主たる対象とし、その作品に関する情報の収集とアーカイブについて検討する。1990年代は、ウェブが生まれインターネットが個人化した時期ではあるが、クラウドやSNS、大規模なデータベースが構築され、利用される前の時代であったため、当時の作品や展覧会、それらに対する詳細な議論や言説の記録が、再利用可能な形で残されているとは言い難い。そこで、最初に述べたように、メディアアート作品を再展示し、新たな作品を制作することを射程に入れた「メディアアート作品制作研究のための総合的なプラットフォーム（PMA: Platform for Media Art Production）」（以下、PMA）を提案した。昨年度は、このPMAの原案の策定と、そこに必要な項目の一次的検討と実装を行った。

1.2.3.2 PMAの共有

昨年度に引き続き今年度は、PMAを日本におけるメディアアート作品の展示制作に長く関わっている、ICC（NTTインターコミュニケーション・センター）とYCAM（山口情報芸術センター）と共有し、ネットワーク構築の具体的な可能性を検討するための準備を行った。詳しくは後述するが

第1章 事業概要

、PMA を実際に使用できるようにするために、PMA 試用のためのリポジトリ（サーバ）と入力用アプリケーションを用意し、合わせてユーザマニュアルと使用開始のための簡易メモ、PMA のソースコードを ICC と YCAM のメンバーに配布し、それぞれの拠点で PMA を試用できるような環境を整えた。

1.3 実施体制

- ・ 事業企画、コーディネーター
 関口 敦仁（愛知県立芸術大学 特任教授）
- ・ 事業運営
 野間 穰（特定非営利活動法人コミュニティデザイン協議会 代表理事）
- ・ メディアアート史を軸としたデータ収集とメディアアート史年表の活用
 関口 敦仁（愛知県立芸術大学 特任教授）
 野間 穰（特定非営利活動法人コミュニティデザイン協議会 代表理事）
 上島 健一（ICG,Inc.）
 川上 詠美（有限会社フルティガ）
 成瀬 健司（有限会社フルティガ）
- ・ メディア芸術データベース登録情報の整備とデータ作成
 関口 敦仁（愛知県立芸術大学 特任教授）
 松尾 奈帆子（アーカイブ・リサーチャー、フリーランス）
 上島 健一（ICG,Inc.）
 野間 穰（特定非営利活動法人コミュニティデザイン協議会 代表理事）
- ・ ネットワーク構築のための準備作業
 久保田 晃弘（多摩美術大学 教授 同大学国際交流センター センター長）
 堀口 淳史（多摩美術大学アートアーカイヴセンター）
 石山 星亜良（多摩美術大学アートアーカイヴセンター）
 関口 敦仁（愛知県立芸術大学 特任教授）
 野間 穰（特定非営利活動法人コミュニティデザイン協議会 代表理事）

第1章 事業概要

1.4 実施スケジュール

業務項目	実施期間（令和5年4月11日～令和6年2月29日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
① 事業企画会議 各事業内容すり合わせ、確認など		◆	◆			◆		◆	◆	◆		
② メディアアート史を軸としたデータ収集とメディアアート史年表の活用												
データ収集				◆	◆	◆	◆	◆				
ウェブ年表改修・更新				◆	◆	◆	◆	◆		◆		
年表の利活用						◆	◆	◆	◆	◆		
③ MADB 登録情報の整備とデータ作成												
過去データの精査		◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆		
データ整備		◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆		
④ ネットワーク構築のための準備作業												
PMA 検討		◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆		
PMA 配布			◆	◆	◆	◆						
ヒアリング								◆	◆	◆		
⑤ 中間報告会							◆					
⑥ 報告書作成									◆	◆	◆	
⑦ 最終報告会											◆	

図 1-1 事業実施スケジュール

第2章 成果・課題・評価

2.1 実施結果・事実

2.1.1 メディアアート史を軸としたデータ収集とメディアアート史年表の活用

2.1.1.1 データ収集の成果と課題

ウェブ版メディアアート史年表はオンラインでの公開を続けている。

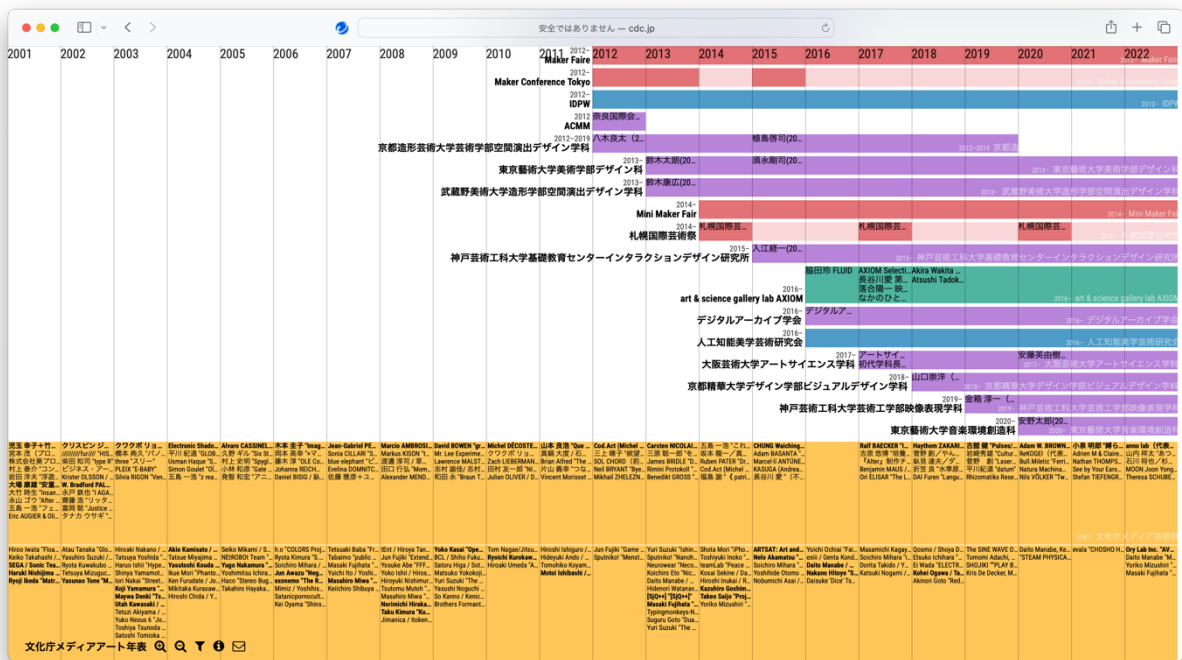


図2-1 ウェブ版メディアアート史年表 <http://cdc.jp/mac>

昨年度の事業において公開されている内容に関して、メディア芸術データベース（以下、MADB）を含むインターネット上の情報を調査し、メディアアート史年表項目の該当する詳細情報へのリンクも実装した。これにより年表作成の目的である俯瞰〔ふかん〕し様々なスケールでメディアアート史を見ることができるとともに、更に詳しい内容を知りたい場合にはインターネット上にある詳細な情報へのアクセスも可能となった。

今年度は掲載をしている項目全てに関する2022年末までの情報を調査しデータを作成、公開しているメディアアート史年表に反映を済ませた。これにより、現在取り上げている項目に関して1950年から2022年まで全てを網羅した年表になっている。

公開しているメディアアート史は、メディアアート史サイトのインフォメーションでも発信しているとおり、飽くまでこれまで本事業に関わっていただいた有識者の集合知と調査から暫定的に示し

第2章 成果・課題・評価

ているものである。今後においてはオンラインでの閲覧やその他の利活用から帰ってくるであろうフィードバックや、カレント情報の更新をどのように行っていくかについて多くのメディアアート分野関係者の意見を聞き定めていきたいと考えている。

2.1.1.2 メディアアート史年表活用の成果と課題

アルスエレクトロニカなど、これまでのメディアアート史年表の展示を見て札幌国際芸術祭で展示したいとの希望を企画者より御連絡を頂いた。当初は大きくプリントしたものを展示するとの話だったが、札幌国際芸術祭側のスタッフとディスカッションを行った結果、ウェブ版の閲覧の利点である拡大縮小表示やスクロールなどを活[い]かし大型モニターでの展示を行う運びとなった。ただウェブ版は当然オンライン環境が必要となり、また長期の展示を行うには表示の安定性も求められるため、これを機にローカル環境での展示を可能にするためのプログラムを開発した。開発したローカル環境用プログラムやデザインはウェブ版を踏襲したものとなっているが、大型モニター用に最適化した表示や、展示で閲覧しやすい挙動を考慮し動作するプログラムを新規に作成している。この開発によって挙動などが改善された部分については、ウェブ版にもフィードバックし反映している。

今回のローカル環境用プログラムの開発により、公共の場所などでの展示が非常に簡易になった利点を活かし、メディアアートに関連する施設や催事などでの利活用が広がるよう情報の周知に努めたいと考えている。

また、活用事例として大学におけるメディアアート史年表を活用した授業が過去あったが、今回の情報収集と更新により、掲載項目と網羅している期間が明確になり、ローカル環境のPCでの閲覧も可能になった結果、より有効で広い活用を望めると考える。今後メディアアート分野のネットワーク拡大の有効なツールとしてメディアアート史年表も積極的に活用し、メディアアートの認知拡大と理解促進を促したい。

2.1.2 データベース登録情報整備の成果と課題

今年度は出典情報を参照しデータベースの状況を調査し、データを追加した。その結果、1950年代、1960年代のデータや日本アンデパンダン展（読売アンデパンダン展）のカタログデータが細分化され入力されていたが、催事・展示データの区別が曖昧で、規模の大きい展覧会は作品データと展示データの境界が曖昧であったため、大部分が非公開となっている。今年度に行った情報整備作業では、出典情報としては、催事のチラシ、パンフレット、カタログなどのオフィシャルなものから、当事者が記録としてまとめた書籍などを当たった。一方で、実際は催事や展覧会が開催されなかったと思しきケースも散見され、必ずしも事前告知情報と整合しない事例もあり、今後、過去の展示情報についての開催情報の確認やデータ作成・修正に係る取決めをするべきだろう。また、過去のみならず今後実施される催事・展示に係る新規データ作成においても、遡及的にデータが入力・作成されていくべきではなく、現在の情報として随時入力されていくべきであるが、オフィシャルなリリースによ

第2章 成果・課題・評価

る事前告知情報や資料と実際の催事・展示とで変更があった場合を想定して催事・展示情報の作成・修正に係る具体的な取決めは必要だろう。ただ、そうしたメディアアート領域における催事・展示についてのデータ作成に係る取決めは、メディアアート領域のコミュニティにおいて相互運用性を担保しつつ検討していく類のものであり、MADBの性格を鑑[かんが]みるに、飽くまでMADBの側に求められるのは、メディアアート領域のアクティビティを基に作成されたデータを、素早く登録・公開し、それら活動状況の情報への適切なアクセスを担保することと言えるだろう。

2.1.2.1 データに関する課題

今回の事業によって現行のMADBに提供されているデータの矛盾が以下のとおり明らかになり、その矛盾は整理可能なものであると目途を立てられた。

矛盾点としては、当初のスキーマや目録規則で収集・作成されたデータを現在のスキーマに解釈してマッピングする段階で、展示・実演データと催事データに分類したデータが不適切なデータであるケース、大きな催事での階層構造が、データのカテゴリー内での階層にうまくフィットしてなかったケースである。いずれも改めて現行MADBのコンセプトに最適化して、再配置する必要がある。矛盾が生じた理由として、開発版スキーマのドキュメントが引き継がれず、マッピングする際に存在しなかったため、この大きな分類とシリーズ、カテゴリー、タイトルをデータ入力の際にうまく最適化できていなかったためと考えられる。

これは、今後新規の入力に際して、一般の入力行為の妨げとならないように配慮すべき点である。

2.1.2.2 データ整備の今後

今年度までの作業によりMADBに登録されているメディアアート分野の全データを改めて把握したことから、特に追加が望まれる催事とその展示内容について以下が挙げられる。

ARTEC、Interaction、アキバTV、1995年以降の各地のビエンナーレ、トリエンナーレなど国際美術展示におけるメディアアート作品、大学由来の展覧会、ISEA、つくば万博、大阪万博、など。

2.1.3 ネットワーク構築のための準備作業

2.1.3.1 PMA 試用バージョン

今年度、ICC（NTT インターコミュニケーション・センター）とYCAM（山口情報芸術センター）スタッフと共有した、プラットフォーム（PMA: Platform for Media Art Production）」（以下、PMA）の試用バージョンには以下のものが含まれている。

第2章 成果・課題・評価

- TAUArtArchiverPMA (PMA アプリケーション)
- リリースノート (テキストファイル)
- ご試用にあたっての免責事項 (テキストファイル)
- 簡易マニュアル (PDF ファイル)
- TAUArtArchiver ユーザマニュアル (PDF ファイル)
- デベロッパフォルダー (ソースコード)

それらに加えて、昨年度の PMA 開発の際に用いた、三上晴子氏の作品に関する 77 件のカードの DBID を、サンプルデータとして添付した。これらは、PMA 専用のサーバから、アプリケーションの「DBID を指定してサーバを開く...」メニューを経由してカードをダウンロードすると、入力の一例として閲覧、編集が可能になる。

試用のための具体的な手順は以下のとおりである。

- PMA のアプリケーションのダウンロードとインストール
- ユーザアカウントの作成 (とログイン)
- PMA_mikami.txt のファイルの内容を、「ファイル > DBID を指定してサーバを開く...」で開いたウィンドウの中に全てコピー
- サーバからテストデータ (三上氏の作品及び展覧会データ) をダウンロード (自動)
- アプリケーションの様々な機能をまずはいろいろ試してみる

なお、PMA アプリケーションは、他者とカードデータを交換しない場合は、サーバへの接続は必須ではなく、ローカル環境で、気軽にカードデータを記述、変更が可能である。

また、配布後のバージョンアップによって、アプリケーションが Apple の公証を取得したので、起動時にセキュリティー警告の表示がされなくなった。

以下に、配布した PMA 試用バージョンのスクリーンショットを示す。

第2章 成果・課題・評価

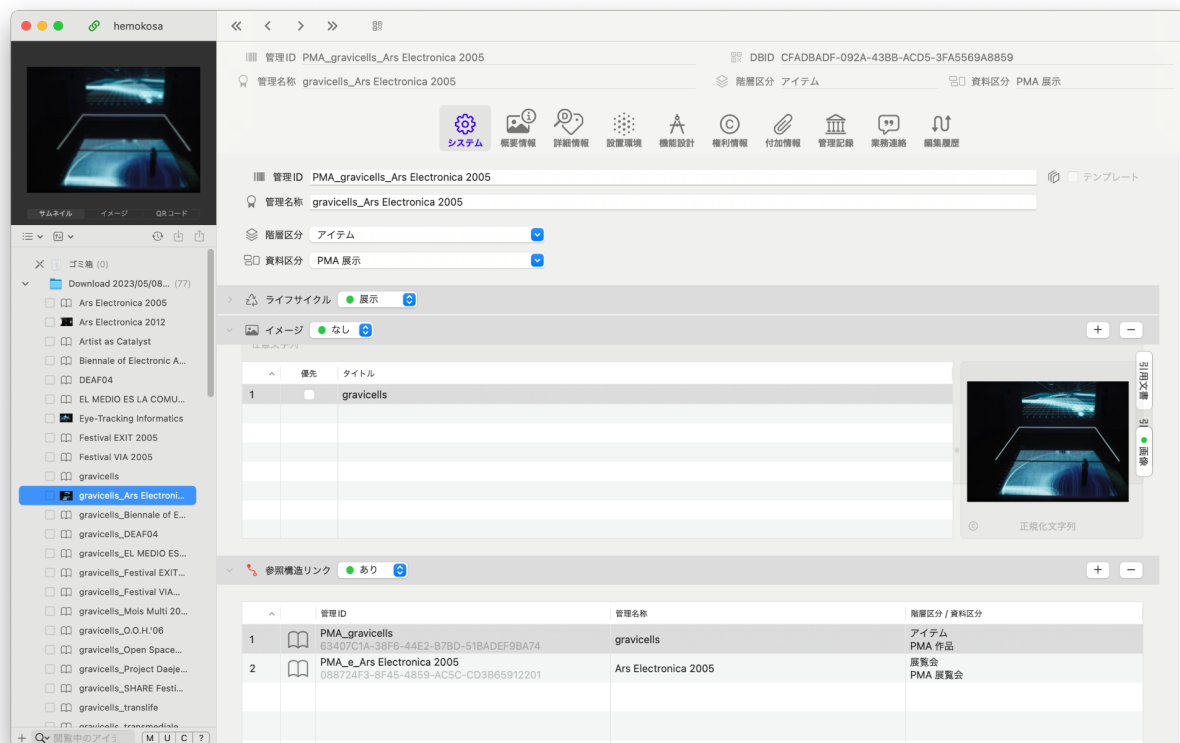


図 2-2 PMA の基準となる「展示」カードの例 (1)

第2章 成果・課題・評価

The screenshot shows the PMA web interface. The main content area displays a configuration for a 'Display' card. The card title is '欲望のコード--Ars Electronica 2012-'. The card is currently set to 'Image' (イメージ) with a thumbnail of a dark space scene. Below the card configuration, there is a table of reference links (参照構造リンク).

管理ID	管理名称	階層区分 / 資料区分
1	PMAWT000_欲望のコード 9ED2F9AE-955A-4C72-9F85-EB4C5AFA852	アイテム PMA 作品
2	PMAET005_Ars Electronica 2012 009DE14C-AC62-4A08-A486-C3A06142A703	展覧会 PMA 展覧会

図 2-3 PMA の基準となる「展示」カードの例 (2)

第2章 成果・課題・評価

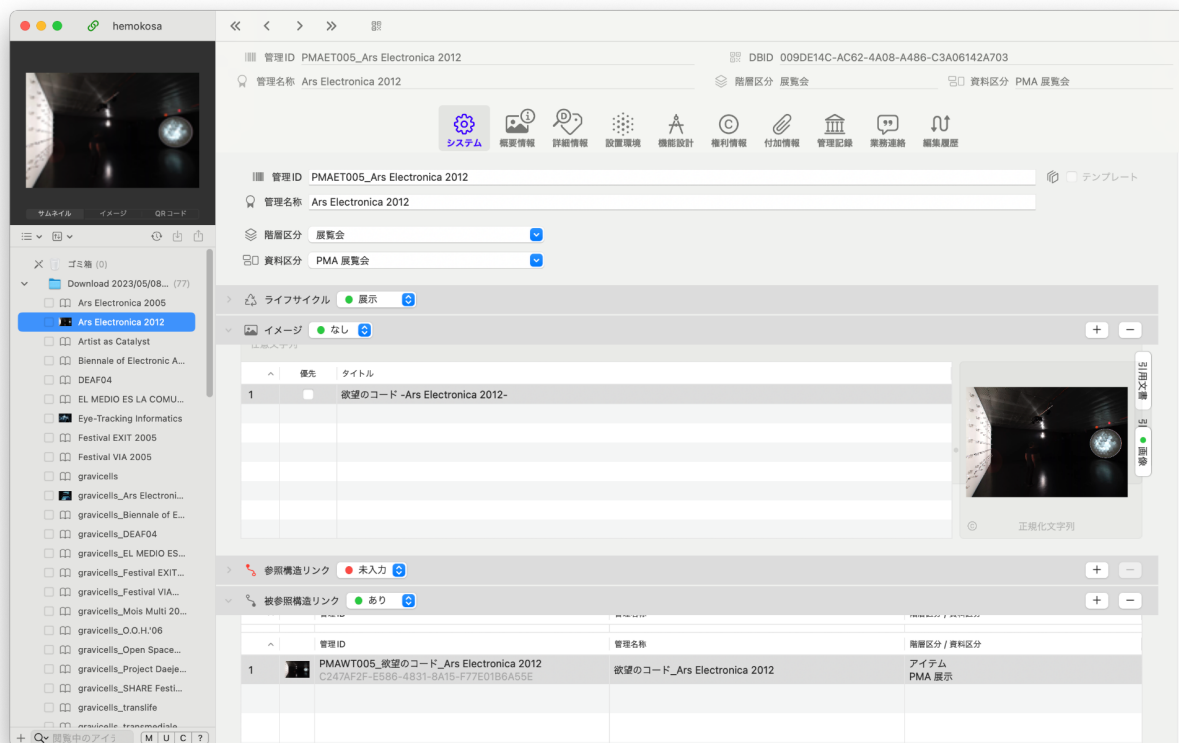


図 2-4 展示の集合体としての「展覧会」カードの例

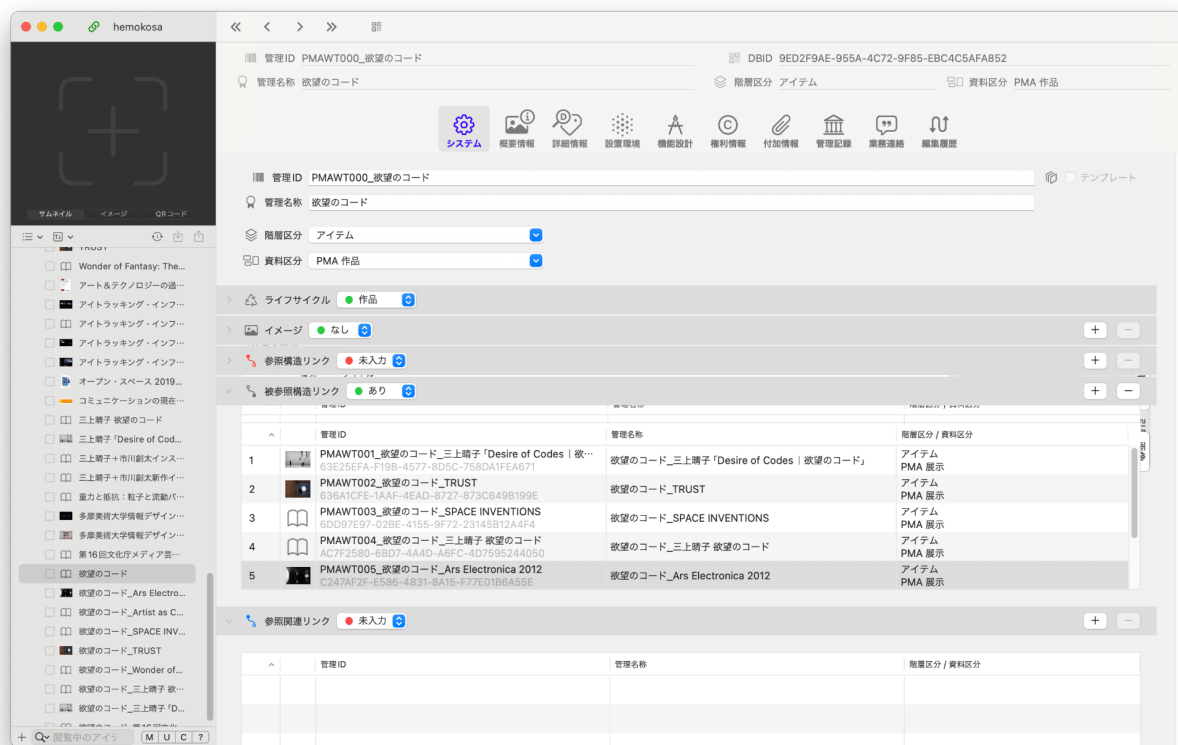


図 2-5 展示の集合体としての「作品」カードの例

2.1.3.2 今年度以降の予定と目標

今年度は、まず本事業の関係者と ICC、YCAM のスタッフがオンラインで一堂に会して、PMA のコンセプトと、アプリケーションの具体的な使用方法について、詳しく説明ができた。参加者からも、様々な質問があり、まずは PMA の内容について理解が深まった。

また、ミーティングでは、アイデアレベルではあるが、具体的な活用の方法などの議論もあった。同時に PMA がテックライダーレベルの詳細な項目の入力が可能であり、データベースの構造の自由度が高いため、業務の一環として PMA を取り入れていくのは重すぎる（業務ではなく、研究になってしまう）という意見もあった。もちろん PMA は、最初から完璧なツールとして構築ができる訳ではなく、ステップ・バイ・ステップで入れられるところから随時入れていく、あるいは複数の人が同時並行的に作業できる、という特長を活かしながら改善を行う必要がある。またこうした PMA の使用法自体に慣れるための期間も必要であるように感じられた。

こうした問題点を踏まえながら、PMA 自体の妥当性検証と、更なる改善を進めていくだけでなく、今後はいくつかの具体的なメディアアート作品を取り上げて、そのインタラクション情報（機能情報）や、インストール情報（環境情報）をどのように PMA で記述できるか（できないか）を、デ

イスカッションしていく必要性を感じた。同時に、詳細な情報が残されていない作品に対しても、最低限残しておくべき項目が何なのかについて、MADB との連携も見据えながら、検討をしていきたいと考えている。

2.2 成果、結果からの推測、課題

本事業ではこれまで、日本のメディアアートの分野において、その活動領域や作品が一般性を持っておらず、この分野の全体像が認識されていない点を考慮に入れ、その全体像を示すための手法を探り出し、事業を進めてきた。その結果としてメディアアート史年表やメディアアート分野のデータの充実・拡充の補助、作品アーカイブや作品の復元展示に向けた情報収集の仕組みとしての PMA の構築やメディアアート活動を啓発するためのネットワークづくりの方法を検討し探ってきた。

メディアアート分野でのアクティビティでは、特に展示や実演において一回性の体験となることが比較的多い。長期的な視座からすると、このような体験性の高い作品は、特にコンピュータを多用し一過性の高い技術を用いた情報機器を利用した作品では、それらのシステムの起動や終了、プログラムの実行、カメラや各種センサ、デバイスの調整などの管理の難しさから、美術館などでの展示期間の短縮や、展示場所の限定などにつながり、そのことに起因して鑑賞者の数が限られる結果、同時代に直接体験した者だけが作品の価値を理解するという事態もたびたび発生する。こうした事態は作品の性質上、仕方がない面もあるが、表現情報の広がり考えたときに閉鎖性が高いと言わざるを得ない。しかし、先進技術を使用した社会的表現という意味においては、これまでもそうした活動の影響力は奥深く存在し続けていたし、単純な一般性を持たせるための公共的なアナウンスの必要性やパブリッシングを伴う活動につなげるだけでは解決できない影響を与えてきた。年表やアーカイブを通して可視化される情報を俯瞰することで浮かび上がってくる歴史的なアクティビティの変遷から、そうした影響力や影響関係についても読み取りは可能である。まずそのための情報の整理が必要だったという点からも、本事業の意味は大きい。しかしながらこのような歴史的な事実を通して、現在のリアルタイムでの各種発表などのアクティビティとの接続やそれらの伝搬をサポートする仕掛けや仕組みは、まだないのが現状である。これらの点から、より美術館や作家、プロデューサーなどの具体的なネットワークを構築するための仕掛けづくりが重要となってくる。海外の美術館では常に新しい表現を持つ作品の増加をうけて、所蔵スペースや展示スペースの増加を進めているが、日本では残念ながら、所蔵した作品に対する使命として現存する所蔵作品のローテーション展示がメインとならざるを得ない状況ということもあり、海外と同様の新しい表現を持つ作品を所蔵展示するための美術館スペースの拡張にはつながっていない。そこには日本の美術館サイドから見たメディアアート作品などの新しい技術や機器を利用する作品の所蔵や展示への扱いの難しさという点も挙げられる。それらの難しさに対する、躊躇が美術館サイドにあるのであれば、それらを取り払い、展示や所蔵の活性化を図る、ネットワークやサポート等が行える体制が必須となる。そのような国内の美術館の常識を、もっとグローバルな考え方へと転化をサポートする仕掛けの考案も今後の課題となっていくだろう。

第3章 実施内容

3.1 事業企画会議

事業企画オンラインミーティング 1

開催日：令和5年5月29日

参加者：メディアアート分野担当：関口 敦仁、久保田 晃弘、野間 穰

文化庁：牛嶋 興平、沼下 桂子

事務局：森 由紀、池田 敬二、佐原 一江

今年度の事業をスタートするに当たり、本事業全体の内容、スケジュールなどを確認するとともに、「メディアアート史を軸としたデータ収集とメディアアート史年表の活用」、「メディア芸術データベース登録情報の整備とデータ作成」「ネットワーク構築のための準備作業」に関する今年度の取組についてディスカッションを行った。

事業企画オンラインミーティング 2

開催日：令和5年6月26日

参加者：関口 敦仁、野間 穰

事業の進捗状況の確認を行い、その後の始業の取組内容などについてディスカッションを行った。

事業企画オンラインミーティング 3

開催日：令和5年9月7日

参加者：関口 敦仁、野間 穰

事業の進捗状況の確認を行い、その後の始業の取組内容などについてディスカッションを行った。

事業企画オンラインミーティング 4

開催日：令和5年9月28日

参加者：メディアアート分野担当：関口 敦仁、久保田 晃弘、野間 穰

文化庁：椎名 ゆかり、毛利 哲哉、牛嶋 興平、沼下 桂子

事務局：森 由紀、池田 敬二、岡部 玲奈、富田 尚美、佐原 一江、沼下 智子

事業の中間報告会前に、本事業全体の進捗度合い、スケジュールなどを確認するとともに、これ以降の今年度の取組についてディスカッションを行った。

事業企画オンラインミーティング 5

開催日：令和5年11月13日

参加者：関口 敦仁、久保田 晃弘、野間 穰

事業の進捗状況の確認を行い、その後の始業の取組内容などについてディスカッションを行った。

第3章 実施内容

事業企画ミーティング 6

開催日：令和5年12月11日

参加者：関口 敦仁、久保田 晃弘、野間 穰

事業の進捗状況の確認を行い、その後の始業の取組、今年度の最終成果内容などについてディスカッションを行った。

事業企画オンラインミーティング 7

開催日：令和6年1月26日

参加者：メディアアート分野担当：関口 敦仁、久保田 晃弘、野間 穰

文化庁：毛利 哲哉、牛嶋 興平

事務局：池田 敬二、岡部 玲奈、平尾 宏一郎、佐原 一江

本年度事業の締めに向けて、事業全体の実施内容を改めて確認するとともに事業報告書の進捗状況を確認し残りの作業について共有した。また本年度事業の成果を受けて来年度に取り組むべき内容などについてディスカッションを行った。

3.2 メディアアート史を軸としたデータ収集とメディアアート史年表の活用

3.2.1 オンラインミーティング

メディアアート史年表関連オンラインミーティング 1

開催日：令和5年7月26日

参加者：上島 健一、成瀬 健司、野間 穰

ウェブ版メディアアート史年表の今年度の取組について確認とディスカッションを行った。

メディアアート史年表関連オンラインミーティング 2

開催日：令和5年8月14日

参加者：上島 健一、成瀬 健司、野間 穰

メディア芸術データベース API の活用などについてディスカッションを行った。

メディアアート史年表関連オンラインミーティング 3

開催日：令和5年8月18日

参加者：川上 詠美、成瀬 健司、野間 穰

メディアアート史年表に関する今年度のデータ作成作業について内容の確認やディスカッションなどを行った。

メディアアート史年表関連オンラインミーティング 4

第3章 実施内容

開催日：令和5年9月20日

参加者：野間 穰

札幌国際芸術祭担当者：細川 麻沙美、坂本 真惟、國安 由香子

メディアアート史年表の札幌国際芸術祭 2024 での展示について札幌国際芸術祭スタッフとディスカッションを行った。

メディアアート史年表関連オンラインミーティング 5

開催日：令和5年9月25日

参加者：上島 健一、成瀬 健司、野間 穰

メディアアート史年表の札幌国際芸術祭 2024 での展示について展示用プログラムの仕様などについてディスカッションを行った。

メディアアート史年表関連オンラインミーティング 6

開催日：令和5年10月16日

参加者：上島 健一、成瀬 健司、野間 穰

メディアアート史年表のデータ追加に伴う更新について確認、ディスカッションを行った。

メディアアート史年表関連オンラインミーティング 7

開催日：令和5年11月11日

参加者：川上 詠美、成瀬 健司、野間 穰

メディアアート史年表に関する今年度のデータ作成作業について、収集したデータの確認などを行った。

メディアアート史年表関連オンラインミーティング 8

開催日：令和5年11月17日

参加者：上島 健一、成瀬 健司、野間 穰

メディアアート史年表の更新について確認し公開作業を行うとともに、展示用プログラムについてディスカッションを行った。

メディアアート史年表関連オンラインミーティング 9

開催日：令和5年12月1日

参加者：関口 敦仁、上島 健一、野間 穰

札幌国際芸術祭担当者：細川 麻沙美、坂本 真惟、國安 由香子、船戸 大介

メディアアート史年表の札幌国際芸術祭 2024 での展示について実際の展示の仕様などについて、札幌国際芸術祭のインストラクターも交えて確認とディスカッションを行った。

第3章 実施内容

メディアアート史年表関連オンラインミーティング 10

開催日：令和5年12月15日

参加者：上島 健一、野間 穰

札幌国際芸術祭担当者：船戸 大介

メディアアート史年表の札幌国際芸術祭2024での展示について実際の展示最終確認、調整などを行った。

3.2.2 メディアアート史を軸としたデータ収集

本事業において調査、データ作成、構築、公開を続けてきたメディアアート史年表について、提示されているカテゴリ内容に関して2022年までを調査しデータ作成を行った。

新たに収集したデータは778件5,446項目である。

3.2.3 メディアアート史年表更新作業

公開を続けているウェブ版メディアアート史年表に以下の更新と改善を行った。

- ・今年度の事業で得られたデータを追加更新する作業を行った。これにより現状でメディアアート史として取り上げている項目に関して取得可能な2022年までの情報の掲載を完了した。

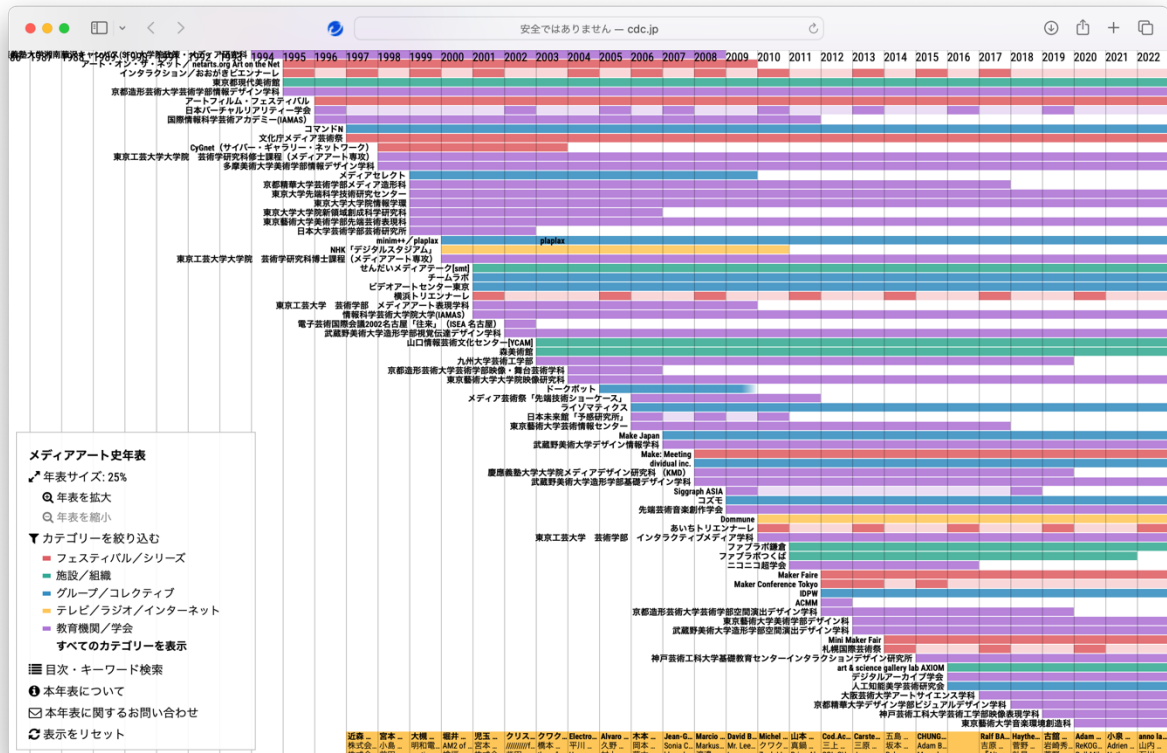


図 3-1 追加公開したデータの一部

第3章 実施内容

- ・ インフォメーション画面の内容を現状に則した内容に更新を行った。



図 3-2 修正したインフォメーション画面

第3章 実施内容

- 目次表示、検索機能を実装した。

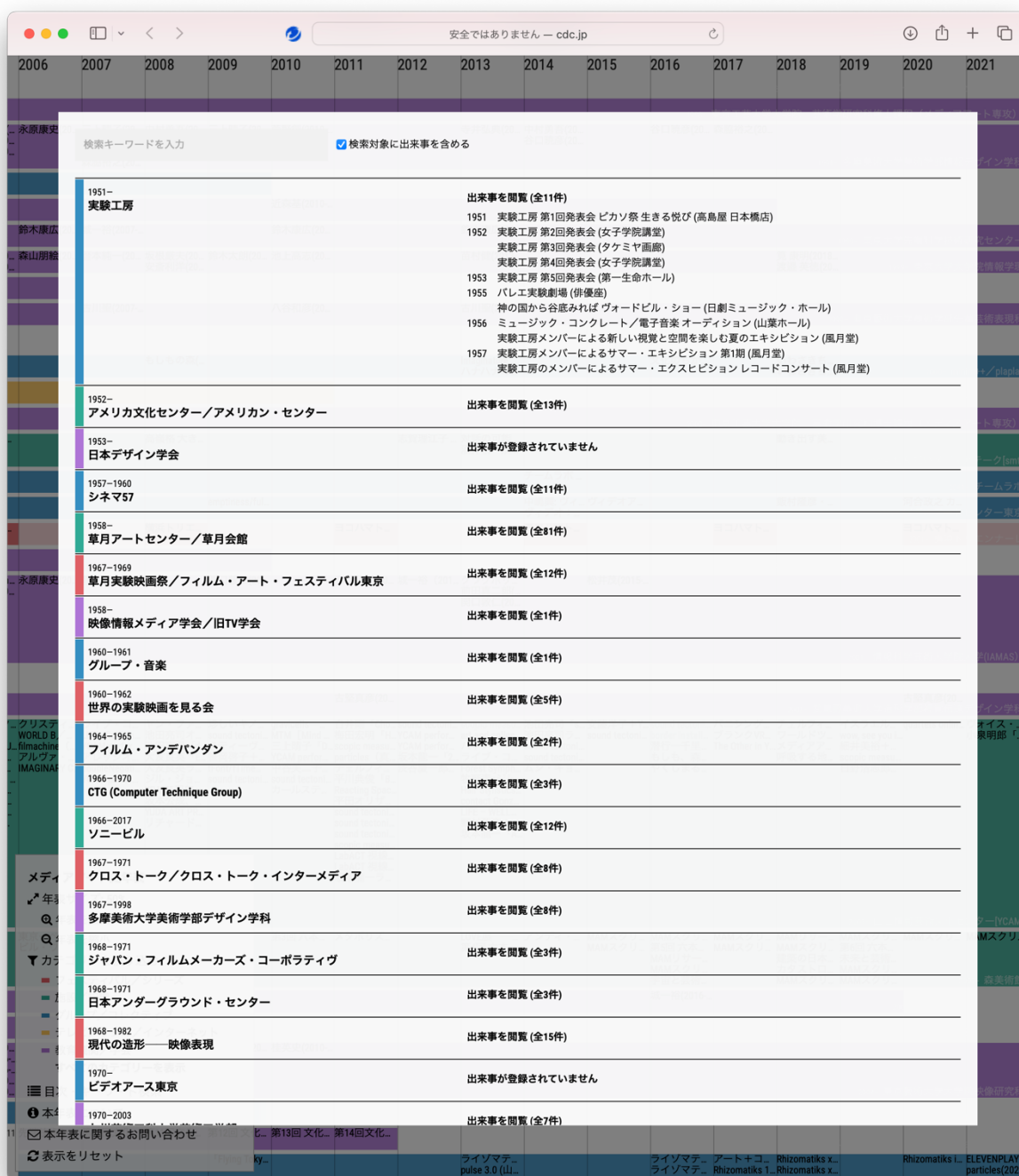


図 3-3 実装した目次表示、検索機能画面

第3章 実施内容

- 機能の追加や改善に合わせてナビゲーション表示を修正した。

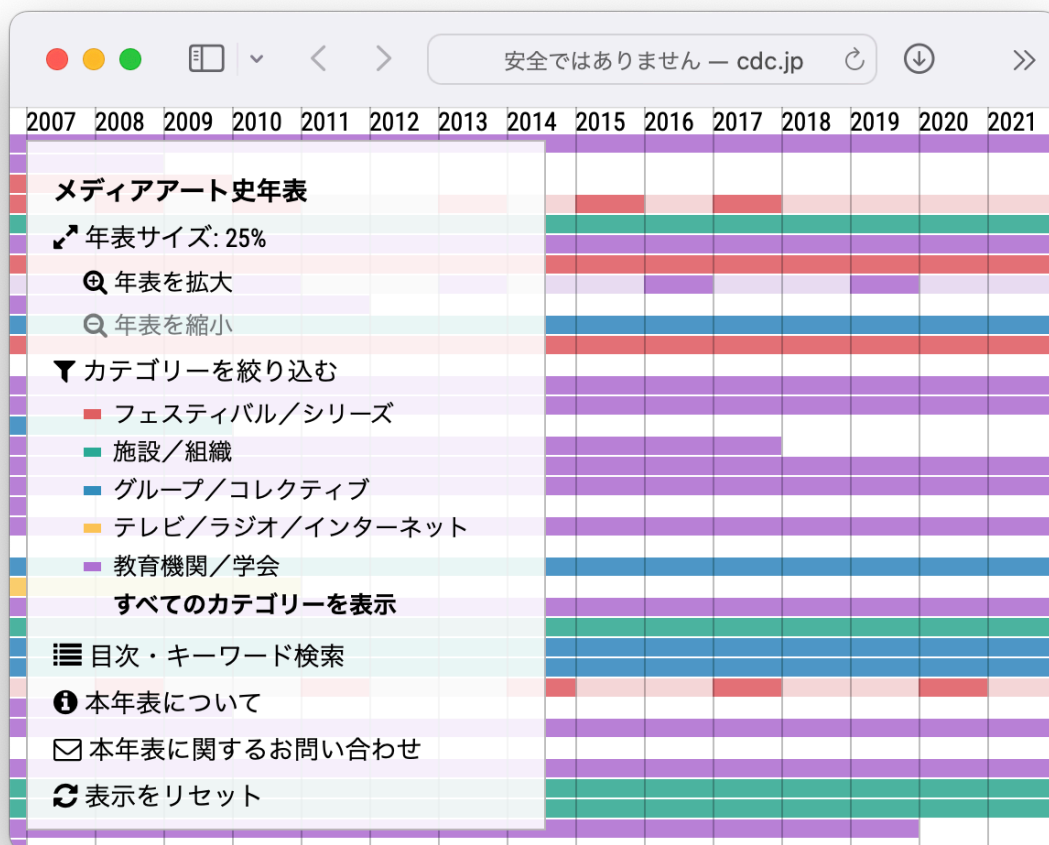


図 3-4 新しくなったナビゲーション表示

- 拡大縮小表示機能、操作ナビゲーションの改善を行った。
- 年表表示のリセット機能を実装した。

3.2.4 メディア芸術データベース API 活用検討

メディア芸術データベース・ラボ（以下、MADB Lab）で公開されている情報や SPARQL エンドポイントを基にプログラマーがテストを行いながら、メディアアート史年表の構築、連携などについて検討を行った。MADB Lab で配布されているデータセットを活用しデータを時系列に配置する作品ビューワーの構築も昨年度から行っており、作業の進行、項目の変更などに伴っての更新なども行っているため、そこで得られた知見も考慮し検討した。

提供されているメディア芸術データベース（以下、MADB）のデータからの年表形式のビューの構築は可能である。しかしながら公開しているメディアアート史年表は各作品やイベントをまとめるグ

第3章 実施内容

グループを定義しており、この部分のデータをメディアアート史年表は独自に持っている。またこのグループの定義も、内包されるイベントの歴史や内容によりビジュアル的に変化させるための項目を設定している。

これらの差異により現状のメディアアート史を示す年表の公開を既に行っており、別途同様の公開を行うために MADB のデータから構築するための労力をかけるよりも、それぞれで公開を続け、項目などで連動する方が有効だと考えて今年度の検討はここまでで終えている。

3.2.5 札幌国際芸術祭展示

札幌国際芸術祭でのメディアアート史年表の展示の機会を得たことをきっかけに、インターネット接続ができないローカル環境端末での閲覧実現、大型モニターでの表示、監視のない場所での公開など展示用プログラムの製作を行った。

展示用プログラムのオンライン版からの改修ポイントは以下である。

- ・ ローカル環境での展示に対する対応
外部リンクの削除、外部サーバファイルの内包化など
- ・ 大型モニター展示に対する対応
画面に合わせたデザイン変更、拡大縮小時の表示の最適化など
- ・ 無操作時の展示用プログラム追加
一定時間の間に観客の操作がない場合に、自動的に年表をスクロール、拡大、詳細情報の表示などを行って年表を自動的に閲覧できるとともに、年表の機能などを知ることができるアニメーションプログラムを作成し実装した。
- ・ 展示中の不慮のエラーに対する対応
展示中の不慮の操作やマシンの不具合などによるプログラムエラーなどから即時に復帰するための、プログラムリセット機能を追加実装した。
- ・ 各機能の改善
ウェブ版からローカル版へ変更するプログラムを構築するに当たり、拡大縮小機能、表示位置の位置補正などのロジックを改善するプログラムの改善を行った。この改善はウェブ版への反映も行っている。

第3章 実施内容

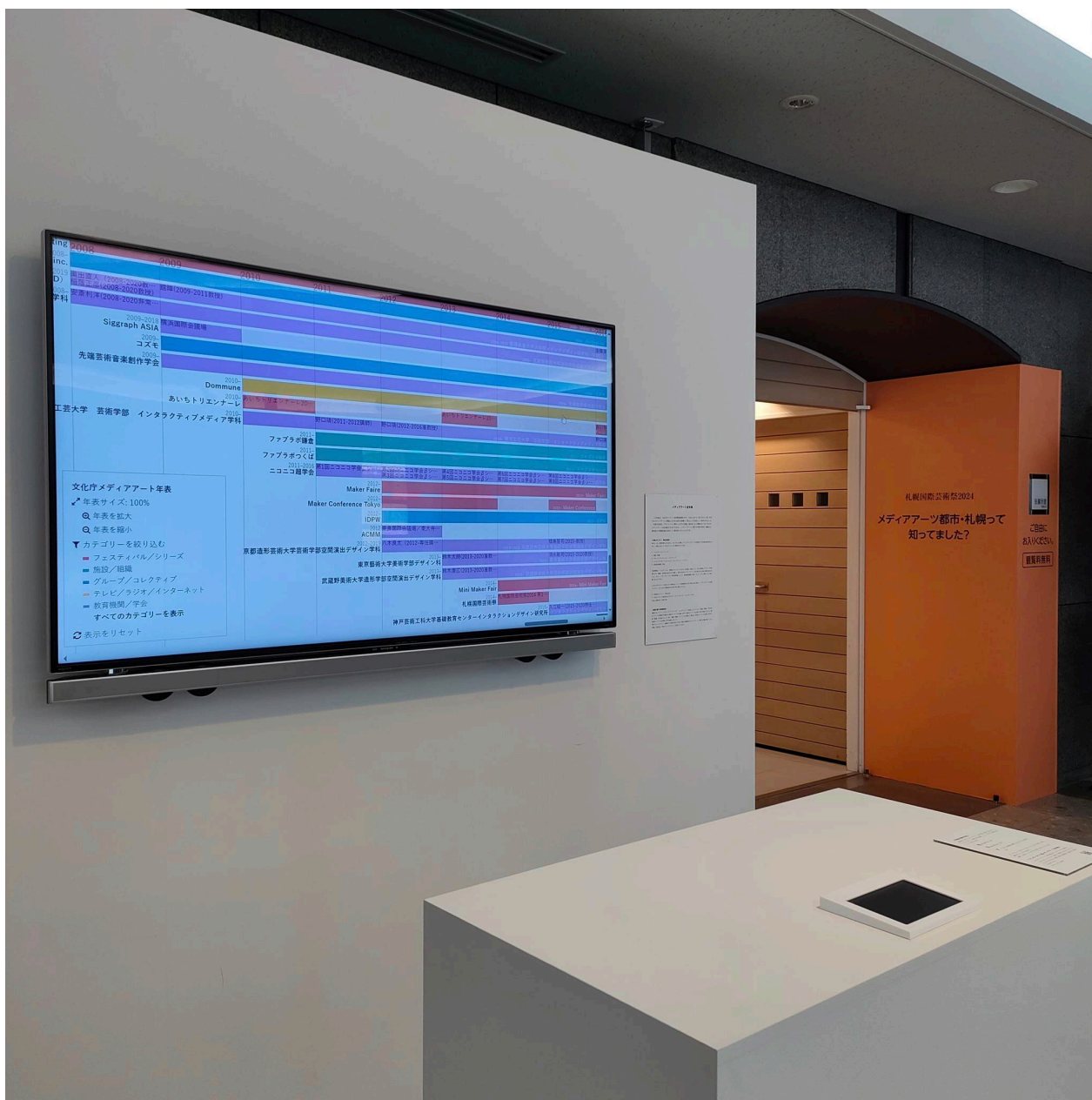


図 3-5 札幌国際芸術祭 2024 での展示の様子

第3章 実施内容

3.3 データベース登録情報の整備

3.3.1 オンラインミーティング

出典情報追加作業打合せ

9月19日

参加者：関口敦仁、松尾奈帆子

愛知県立芸術大学 メディアスタジオ

他、データ処理に関するメール通信

参加者：関口敦仁、松尾奈帆子、野間穰

3.3.2 過去データの精査と出典情報の追加

「メディア芸術データベース（開発版）」と「メディア芸術データベース（ベータ版）」を比較して、公開データと非公開データの関係性が曖昧であるため、これまで非公開としていたデータの今後の公開への拡充も見越して、公開・非公開分のデータも含めて参照して、全体の精査を行った。

そのための手続として、昨年度作成した時系列作品ビューワー（MADB Lab で配布されているデータセットを活用しデータを時系列に配置する作品ビューワー）に反映して、シリーズとタイトルの入力から、作品情報のグルーピングが精査されているかを判断し、データを編集した。また、昨年のカテゴリライズに音楽カテゴリーの細分化と舞台の追加を行った。

The screenshot displays a complex data visualization of media art works. The top horizontal axis represents years from 2007 to 2012. The vertical axis lists various media art categories, each associated with a specific color. The main content area is a grid where each cell represents a work entry, with the color of the header corresponding to the category in the legend. The entries include titles in Japanese, such as 'MA2: オープン・スペース 2009' and 'MA2: デジタルアートプロジェクト', along with brief descriptions and dates. The interface is designed for detailed data analysis and categorization of a large volume of media art projects.

図 3-6 作品ビューワー2009年 - 2010年部分

第3章 実施内容

出典を参照して、データの間違いやデータの重複について記載。また、催事データとの重複、誤差などについてもチェックを行い記述し、出典情報を追加した。

それぞれの現在の調査での数値を示す。

全体のデータ数は 28,856 点である。

このうち、16,874 点について、調査を終えた。

これらの内、出典との日時、演目等間違いのあるものが 35 点。

同じ展示・実演項目が重複しているものが 1,002 点あった。

また、展示・実演から催事に移行するのが好ましいデータは数百点、散在している。

3.3.3 データベース整備作業

昨年度から継続し、カテゴリズを細分化し、反映した。

また、出典情報についても追加した。

出典リストは以下である。

書籍:東京画廊六十年

国立美術館 所蔵作品総合目録検索システム

冊子:ときわ画廊 1964-1998

紀要:新潟市美術館・新潟市新津美術館研究紀要 第1号

書籍:日本アンデパンダン展全記録

書籍:志水楠男と南画廊

展覧会冊子:「日本国際美術展 6回」

展覧会冊子:「日独ビデオ・アート展:新しい認識への道」

展覧会冊子:「日独ビデオ・アート展 新しい認識への道 1978」

書籍:草月とその時代

展覧会冊子:「ヒューマン・ドキュメンツ '70」

展覧会冊子:「ヒューマン・ドキュメンツ '84/'85」

書籍:ドキュメント 実験工房 2010

展覧会冊子:「神戸須磨離宮公園現代彫刻展」

冊子:田村画廊 真木画廊 駒井画廊 真木・田村画廊 展覧会リスト (美術手帖)

書籍:スタジオ 200 活動誌

展覧会冊子:「ビデオ・カクテル展. 第2回 テーマ:ドラマ」

展覧会冊子:「ビデオ・カクテル 3」

雑誌:美術手帖 1966年11月号増刊

展覧会冊子:「4人の作曲」

展覧会冊子:「エスパース土曜」

書籍:エクспанデッド・シネマ再考

第3章 実施内容

- 展覧会冊子:「今日の作家展 65」
展覧会冊子:「今日の作家展.'66年」
カタログ:今日の作家展. 1964-1989
書籍:50 years of galerie 16
展覧会冊子:「今日の作家 70」
展覧会冊子:「グラフィックとポスト・グラフィック スコアー展」
展覧会冊子:「山口勝弘 ビデオラマ展」
展覧会冊子:「飯村隆彦のビデオアート展」
書籍:北九州市立美術館 20年誌
展覧会冊子:「ふくい国際青年メディアアートフェスティバル. 第1回」
展覧会冊子:「マース・カニングハム舞踊団日本公演プログラム (現代舞踊シリーズ ; No.25)」
展覧会冊子:「今日の音楽 : music today. 10」
カタログ:「美術史探索学入門」
カタログ:石子順造的世界
カタログ:72replay 展
展覧会冊子/チラシ:「東京展. 第1回」
展覧会冊子:「第18回今日の作家展 NOVEMBER STEPS」
展覧会冊子:「第19回今日の作家展 内面化される構造」
展覧会冊子:「第20回今日の作家展 [面] をめぐる表現の現在」
展覧会冊子:「第21回今日の作家展 インスタレーションとは何か」
展覧会冊子:「第22回今日の作家展'86 現代美術の黙示録 I 魂の深層から」
展覧会冊子:「第23回今日の作家「位相」展」
展覧会冊子:「第24回今日の作家「多極の動態」展」
展覧会冊子:「第25回今日の作家展 かめ座のしるし Shell and Vessel, Signifying」
カタログ:現代美術における写真展
展覧会冊子:「現代のヴィジョン」
案内状:「新しい素材による美術展[案内状]」
書籍:Fluorescent chrysanthemum remembered
展覧会冊子:「Exhibism '76: 分析と文節」
展覧会冊子:「現代のヴィジョン」
展覧会冊子:「Arts on computer: 日本のC・G (コンピュータ・グラフィックス) アート展」
展覧会冊子:「山口勝弘と北代省三展: イカロスの夢」
展覧会冊子:「抽象と幻想」
雑誌:美術手帖 69年5月号増刊 付録
書籍:大辻清司アーカイブ 2
書籍:大辻清司アーカイブ 6

第3章 実施内容

書籍:西武美術館・セゾン美術館の活動
展覧会冊子:「メディア・アート展:生活空間に発信される現代のアート」
展覧会冊子:「カナダからの11のビデオ作品」
カタログ:ホログラフィ・アートの先駆者
展覧会冊子:「ビデオ・アンデパンダン展:アート&ドキュメント」
展覧会冊子:「名古屋国際ビエンナーレ・ARTEC'89:公式カタログ」
展覧会冊子:「映像考/...:現代芸術における映像性の新たな展開 = Thinking visuals」
展覧会冊子:「Film & Laser」
展覧会冊子:「今日の作家展 65」
展覧会冊子:「山本圭吾ビデオ展:呼吸によるコミュニケーション = Keigo Yamamoto」
展覧会冊子:「名古屋国際ビエンナーレ・ARTEC'91:公式カタログ」
書籍:具体美術の18年
書籍:GUTAI
展覧会冊子:「ハイテクノロジー・アート公募展 1983」
冊子:内科画廊——'60年代の前衛
DVD:フィルム・アンデパンダン 1964:ぼく自身のためのCM
書籍:西村画廊 35年+
展覧会冊子:「山口勝弘展:「実験工房」からテアトリーヌまで:メディア・アートの先駆者」
展覧会冊子:「東京現代音楽祭. 第2回」
書籍:洲之内徹と現代画廊
展覧会冊子:「日本アンデパンダン展 第13回」
冊子:美術ジャーナル 49号
書籍:輝け 60年代
カタログ:生誕 100年松澤宥
カタログ:津高和一とゲンビの作家たち
展覧会冊子:「異端の画家たち:読売アンデパンダン十周年記念」
雑誌:SAC 各号
展覧会冊子:「野外造形'69」
書籍:東京国立近代美術館 60年史
書籍:京都国立近代美術館 50年史
展覧会冊子:「オーストラリア・ビデオアート展 = Works by Australian video artists」
展覧会冊子:「今日のアメロカ・ビデオ:20の新作 = American video: twenty new works」
カタログ:「現代美術の実験」
カタログ:「ぬぐ絵画」
展覧会冊子:「2つの企画展」
展覧会冊子:「Japanische Musiktage」

第3章 実施内容

展覧会冊子:「Japan '92 3rd Video Television Festival at Spiral = 第3回ビデオ・テレビ・フェスティバル」

展覧会冊子:「飯村隆彦のメディア・ワールド: ビデオ・インスタレーション&回顧上映展」

展覧会冊子:「集団60 野外彫刻展目録」

展覧会冊子:「シェル美術賞展目録 第4回 図録」

展覧会冊子:「シェル美術賞展 第8回」

展覧会冊子:「シェル美術賞展 第10回」

展覧会冊子:「シェル美術賞展 第11回」

展覧会冊子:「現代イタリア美術展目録: 十周年記念展のひとつとして」

展覧会冊子:「東京ビデオフェスティバルレポート 第3回 図書」

展覧会冊子:「日米ビデオアート展」

展覧会冊子:「山口勝弘展: ヴィトリーヌからビデオまで」

展覧会冊子:「日本近代彫刻の展開 開館30周年記念展第II部 図録」

展覧会冊子:「VIDEO COCKTAIL 図書」

展覧会冊子:「小林はくどう展 1990: はくどうのビデオジャングル 図書」

カタログ:フルクサス展

展覧会冊子:「美術という幻想の終焉展」

カタログ:立ちのぼる生命

展覧会冊子:「盗まれた眼」

書籍:日本画廊 1966-1990

カタログ:実験工房と瀧口修造

冊子:山口勝弘展『日記』

書籍:東京都写真美術館 総合開館20周年史

書籍:長野県信濃美術館 50年の歩み

展覧会冊子:「ドイツ・ビデオアート 20年の歩み」

展覧会冊子:「'70年代、写真の媒体による表現」

展覧会冊子:「河口龍夫 展」

展覧会冊子:「レクイエム: 榎倉康二と33人の作家 / 榎倉康二 [ほか作]; 斎藤記念川口現代美術館編」

雑誌:美術手帖 1959年5月

雑誌:美術手帖 1967年7月号

書籍:美術手帖 1985年6月号

雑誌:音楽芸術 7, 13, 15, 16, 26, 28, 31, 39, 43, 45, 48

書籍:日本国際美術展と戦後美術史

冊子:プラザディックの記録

雑誌:みづえ 1964年4月 P76

第3章 実施内容

展覧会冊子:「今日のコンクリート・ポエトリー」
冊子:ブリヂストン美術館 50 年史
書籍:ヴェネチア・ビエンナーレー日本参加の 40 年
展覧会冊子:「フォンタナとカポグロッシ」
冊子:THE PLAY1967→1999
カタログ:関西の美術
冊子:信濃橋画廊 1965-
冊子:藍画廊 1975-
冊子:藍画廊 1981-
冊子:藍画廊 1986-
書籍:フジテレビジョンギャラリー
冊子:キリンプラザ大阪 1991-
展覧会冊子:「第 1 回 草月実験映画祭」
展覧会冊子:「3 人の会」
カタログ:72replay 展
書籍:日本戦後音楽史 上
冊子:都民合唱コンクール 20 年の歩み
雑誌:今日の音楽 16
チラシ:国際コンピューター・アート展
展覧会冊子:コンピューター・アート展 '75
書籍:日本国際美術展と戦後美術史
雑誌:パイパーズ 15 (8) (176) 1996 年 4 月
ウェブ:ARS ELECTRONICA ARCHIVE
ウェブ:ICC ウェブサイト
ウェブ:慶應義塾大学アート・センター / アーカイヴ
慶應義塾大学アートセンター 瀧口修造コレクション
慶應義塾大アートセンター アーカイブ史料

第3章 実施内容

3.4 ネットワーク構築のための準備作業

3.4.1 オンラインミーティング

ネットワーク構築のための準備作業オンラインミーティング 1

開催日：令和5年5月25日

参加者：久保田 晃弘、堀口 淳史、石山 星亜良

ネットワーク構築のための準備作業オンラインミーティング 2

開催日：令和5年6月15日

参加者：久保田晃弘、堀口 淳史、野間 穰

ICC：畠中 実、指吸 保子、鹿島田 知也

YCAM：会田 大也

文化庁：毛利 哲哉、牛嶋 興平、沼下 桂子

事務局：池田 敬二、佐原 一江

（その後は、本事業担当者、ICC（NTT インターコミュニケーション・センター）、YCAM（山口情報芸術センター）からこのミーティングに御参加を頂いた方々が参加するプラットフォーム

（PMA: Platform for Media Art Production）」（以下、PMA）メーリングリストを立ち上げて、そこで随時連絡を行う）

ネットワーク構築のための準備作業オンラインミーティング 3

開催日：令和5年10月20日

参加者：久保田 晃弘、堀口 淳史、石山 星亜良

ネットワーク構築のための準備作業オンラインミーティング 4

開催日：令和5年10月30日

参加者：久保田 晃弘、堀口 淳史、石山 星亜良

ネットワーク構築のための準備作業オンラインミーティング 5

開催日：令和5年11月14日

参加者：久保田 晃弘、堀口 淳史、石山 星亜良

ネットワーク構築のための準備作業オンラインミーティング 6

開催日：令和5年12月12日

参加者：久保田 晃弘、堀口 淳史、石山 星亜良

ネットワーク構築のための準備作業オンラインミーティング 7

第3章 実施内容

開催日：令和5年12月20日

参加者：久保田 晃弘、堀口 淳史、石山 星亜良

ネットワーク構築のための準備作業オンラインミーティング 8

開催日：令和6年1月9日

参加者：久保田 晃弘、堀口 淳史、石山 星亜良

3.4.2 PMA の配布

PMA の配布内容については、2.1.3.1 に記載されているとおりである。まず、令和5年5月5日に、関係者に version 1.2.1 を配布し、その後、令和5年9月27日に version 1.2.7 を配布した。version 1.2.1 以降のリリースノートは以下のとおりである。

TAUArtArchiver リリースノート

▶ version 1.2.7 2023/09/27

【重要】-----

version 1.2.7 で作成、または編集したカードは、
version 1.2.6 以下の環境では読み込むことができません。
version 1.2.7 以上にアップデートしてから読み込みを行ってください。

-
- ・ CSV 形式読み込み機能において、システム > サムネイルとシステム > イメージの読み込み機能を追加
 - ・ CSV 形式読み込み機能において、概要情報 > タイトル > 名称と概要情報 > 作家署名 > 表記の読み込み時に
改行文字を自動削除するように改良
 - ・ すべてのタグ形式入力欄において、タグ文字列に半角スペースを利用できるように変更
 - ・ その他、細かなユーザインターフェースの改良

▶ version 1.2.6 2023/09/23

- ・ 「DBID を指定してサーバを開く」メニューの実行時に、カードの数が数千件を超える場合、極端に動作速度が遅くなるバグを修正
- ・ 初回起動時のセキュリティー警告を回避するために、Apple の公証を取得

▶ version 1.2.5 2023/08/04

- ・ 編集履歴カテゴリーを表示した状態で更新日時欄の項目を選択し、編集メニューから履歴を

第3章 実施内容

編集できてしまうバグを修正

- ・ CSV 形式読み込み機能において、version 1.2.1 より発生していた、タグ形式入力欄の入力状態を正しく読み込めていなかったバグを修正

▶ version 1.2.4 2023/07/11

- ・ 一定時間間隔での自動同期モードを追加
- ・ 設定ダイアログを追加
- ・ エディタウィンドウが、ウィンドウメニューのウィンドウ一覧に正しく表示されるように改良
- ・ カード一覧の状態アイコンの視認性を改善
- ・ バックグラウンドでのデータベースの書き込み中にアプリケーションを終了する場合の挙動を改善
- ・ version 1.2.3 において発生していた、エディタウィンドウを閉じた時のメモリーリークバグを修正
- ・ その他、細かなユーザインターフェースの改良

▶ version 1.2.3 2023/07/04

- ・ 構造リンクと関連リンクを除く、すべての表形式入力欄において、カット・コピー・ペースト・複製に対応
 - 互換性のある情報に対して相互にコピー&ペーストが可能な入力欄 ----
 - イメージ・タイトル
 - 作家名・本名・クレジット・パブリッシャー・著作権者・所有者
 - 作品サイズ・展示サイズ
 - 継続時間・鑑賞時間制限
 - 展示形式・展示空間・展示サイズ・環境光・照明・音響・電源・通信・煙幕・その他環境
 - 入力映像・入力音声・入力センサ・制御ハードウェア・出力映像・出力音声・出力デバイス
 - 公開情報・非公開情報
 - 管理履歴・貸出履歴
- ・ 権利情報カテゴリー > 評価額に通貨コードの選択肢を追加
- ・ ローカルリポジトリの任意ディレクトリまたは、外部ディスクへの配置に対応
(ユーザディレクトリ > 書類 > TAUArtArchiver.artdb リポジトリファイルを、任意ディレクトリまたは、外部ディスク内のリポジトリファイルへのエイリアスとして設置)
- ・ 複数エディタウィンドウ使用時の操作性を改善

第3章 実施内容

- ・ macOS Mojave 環境において操作性を改善
- ・ 特定の OS 環境において、QRCode プリント時に印刷が成功しているにもかかわらず、エラーダイアログが表示されることがあるバグを修正
- ・ version 1.2.2 の設置環境カテゴリと機能設計カテゴリの表形式入力欄において、特定の条件下で選択肢が表示されなくなるバグを修正
- ・ その他、細かなユーザインターフェースの改良

▶ version 1.2.2 2023/06/02

【重要】-----

「すべてをサーバと同期」「すべてをサーバからダウンロード」「すべてをサーバへアップロード」ボタンの挙動が、「サーバと同期」「サーバからダウンロード」「サーバへアップロード」として、選択されたカードのみを対象とするように変更されました。

-
- ・ 同一階層のカードやアルバムをまとめて選択する機能を追加（「同一階層を選択」メニュー）
 - ・ カード一覧とすべての表形式入力欄において、すべての選択を解除する機能を追加（「すべてを選択解除」メニュー）
 - ・ 選択項目から新しいアルバムを作成する機能を追加（「選択項目から新規アルバム」メニュー）
 - ・ カードやアルバムの階層関係をメニューから指定して移動する機能を追加（「移動」メニュー）
 - ・ 構造リンクと関連リンクの入力欄において、選択されたアイテムを開く機能を追加（コンテキストメニュー内の「開く」メニュー）
 - ・ 構造リンクと関連リンクの入力欄において、DBID のコピーに対応
 - ・ カード一覧のフィルタリング設定に「エラー」を追加
 - ・ イメージ入力欄の画像からサムネイルを生成する機能を追加（コンテキストメニュー内の「サムネイルに登録」メニュー）
 - ・ すべての引用画像入力欄において、画像の書き出し機能を追加（コンテキストメニュー内の「書き出す」メニュー）
 - ・ すべての引用画像入力欄において、カット・コピー・ペーストに対応
 - ・ すべての引用画像入力欄において、ピクセルデータのドラッグ&ドロップでの登録に対応
 - ・ 「すべてをサーバと同期」「すべてをサーバからダウンロード」「すべてをサーバへアップロード」ボタンの挙動を、
「サーバと同期」「サーバからダウンロード」「サーバへアップロード」として、選択されたカードのみを対象とするように変更
 - ・ version 1.2.1 のすべての選択肢形式入力欄とタグ形式入力欄において、

第3章 実施内容

内容が記述されているにもかかわらず、状態に応じてペインを開閉する機能が動作しないバグを修正

- ・ version 1.2.1 の同一階層の表示機能において、特定の条件下で正しく選択項目が変更されないバグを修正
- ・ その他、細かなユーザインターフェースの改良

▶ version 1.2.1 2023/05/05

【重要】-----

version 1.2.1 で作成、または編集したカードは、
version 1.2.0 以下の環境では読み込むことができません。
version 1.2.1 以上にアップデートしてから読み込みを行ってください。

-
- ・ 一度に複数個のカードを生成する機能を追加（「新規複数のカード」メニュー）
 - ・ 一度に複数個のカードの複製を生成する機能を追加（「複数の複製」メニュー）
 - ・ 「状態の変更」メニューから、カード内の複数の入力欄の状態を一括して変更する機能を追加
 - ・ 「サーバで管理を開始」と「サーバで管理を停止」において、取り消しとやり直し機能を追加
 - ・ 処理に時間のかかる一部の操作で、進行中のキャンセル機能を追加
 - ・ 展示環境カテゴリと機能設計カテゴリのいくつかの入力欄において、
8項目以上のアイテムを登録すると、表のスクロールができないバグを修正
 - ・ 特定の環境において、「アカウントの情報」ダイアログと、「アカウント情報の修正」ダイアログの表示が乱れるバグを修正
 - ・ カード一覧での「すべてを選択」時に、ゴミ箱とゴミ箱内のカードやアルバムを選択しないように改良
 - ・ すべてのタグ形式入力欄において、重複したタグの入力ができないように改良
 - ・ 処理に時間のかかる場合に、進行中ダイアログを表示するように改良
 - ・ 旧バージョンの **XML** 形式のアーカイブファイルに含まれる、実体のない画像ファイルのパスの扱いを改良
 - ・ 「アーカイブを読み込む」「CSV 形式を読み込む」「アルバム階層を読み込む」において、
読み込み後に自動生成されるアルバム名から拡張子を削除し、常に最上位の階層に配置されるように変更
 - ・ 「アルバムの階層を読み込む」メニューと「アルバムの階層を書き出す」メニューの名称を、
「アルバム階層を読み込む」と「アルバム階層を書き出す」にそれぞれ変更
 - ・ 「アーカイブを書き出す」メニューから生成されるアーカイブファイル内の **XML** ファイルと、
サーバへアップロードされる **XML** データの最適化をおこない、データサイズを削減

第3章 実施内容

- ・処理に時間のかかる場合に、レインボーカーソルの出現頻度を削減
- ・XML 形式のアーカイブファイルの読み込み機能を廃止
- ・「XML 形式を読み込む」メニューを削除
- ・その他、細かなユーザインターフェースの改良

3.4.3 PMA の使用法

PMA の配布の際に同封した「簡易マニュアル」のハンドアウトを以下に掲載する。

<h4>入力アプリケーション</h4> <h5>役割</h5> <ul style="list-style-type: none">・ カードの作成と編集・ 表記揺れの排除・ 編集履歴の監視・ サーバへのアップロードとサーバからのダウンロード・ オフラインでのカードの編集	<h4>入力アプリケーション</h4> <h5>特徴</h5> <ul style="list-style-type: none">・ ユーザ登録をおこない、サーバへログインして利用することにより、他の利用者とカードの共有や共同編集が可能・ ユーザ登録をおこなわない場合は、オフライン作業となり、個別のコンピュータ上でカードの作成や編集が可能・ ユーザ登録をおこなっている場合でも、サーバへログインしていないときにはオフライン作業となる（後にログインした時点で、蓄積された編集をサーバへ反映させることができる）・ オフライン作業が可能のため、地下室や倉庫、屋外などインターネットが無い場所でも作業が可能
<h4>入力アプリケーション</h4> <h5>動作環境</h5> <ul style="list-style-type: none">・ macOS Mojave 10.14 以上・ Retina ディスプレイ搭載機、または 1920×1080 ピクセル以上のディスプレイ・ 起動ディスクの空き容量 1G バイト以上	<h4>インストール</h4> <h5>準備</h5>  <ol style="list-style-type: none">1. ダウンロードしたファイル2. 1をダブルクリックして開くと表示される3. 2をダブルクリックして開くと入っているアプリケーションを開く4. 3のアプリケーション本体を「アプリケーション」フォルダなどにドラッグ&ドロップ

図 3-7 PMA 簡易マニュアル (1~4)

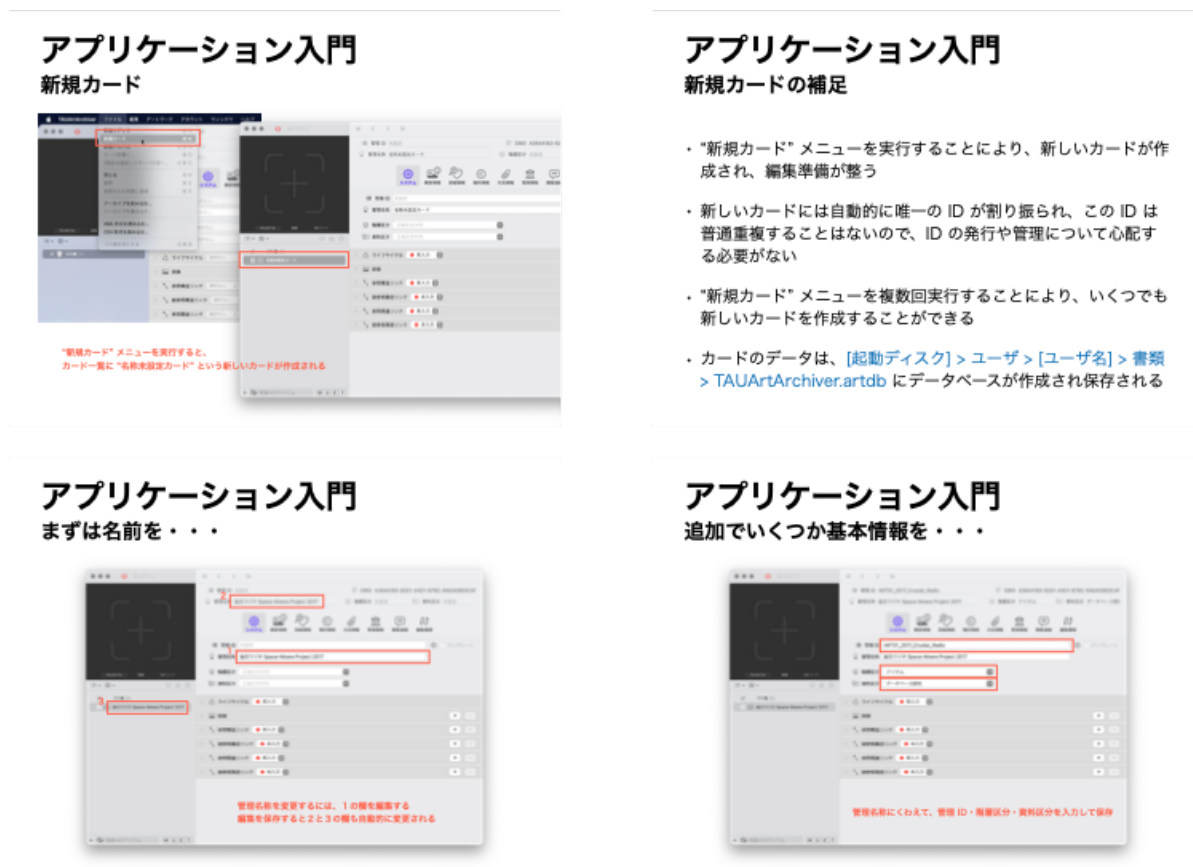


図 3-8 PMA 簡易マニュアル (5~8)

アプリケーション入門

基本情報の補足①

- ・ 管理名称は、人間が資料を管理する上での呼び名に該当し、作家名や作品名などから組み立てられるフレーズ（他のカードと重複しないことが望ましい）
- ・ 管理 ID は、人間が資料を管理する上での番号や記号に該当し、各種台帳や一覧表での管理番号などから組み立てられるフレーズ（他のカードと重複しないことが望ましい）
- ・ DBID は、システムが資料を管理する上で自動的に付与する唯一性のある ID であり、管理 ID とは別のものである
- ・ **管理名称・管理 ID・DBID はカード公開時に公開される**

アプリケーション入門

基本情報の補足②

- ・ 階層区分は、展覧会・フォンド・シリーズ・ファイル・アイテムから選択でき、自由記述も可能
- ・ 資料区分は、資料のまとまりを示すものであり、自由記述
- ・ 各種基本情報は省略することができるが、管理名称と管理 ID は入力しておくことが望ましい
- ・ 管理名称や管理 ID が省略されている場合は、表示の代替手段として DBID が利用される

アプリケーション入門

サムネイルを設定①



アプリケーション入門

サムネイルを設定②



図 3-9 PMA 簡易マニュアル (9~12)



図 3-10 PMA 簡易マニュアル (13~16)



図 3-11 PMA 簡易マニュアル（17～20）

カードについて

入力状態

- ・グループに含まれる各種項目には、入力状態（未入力・不明・概念なし・あり・なし）を設定できる項目が存在する
- ・入力状態は、項目が空欄の場合にその理由を明示したり、具体的な情報が入力されている場合でも一時的に未記入扱いにしたいときなどに利用される
- ・空欄は、未入力・不明・概念なし・なしと4つに区別され、それぞれ、「入力作業に着手していない状態」「調査したが明確な情報を得ることができなかった状態」「概念が存在しないので記述しないことが適切である状態」「概念は存在して調査をおこなったが、記述するものがない状態」を表す

カードについて

入力状態とウェブサイト



カードについて

入力項目の書式

- ・グループに含まれる各種項目、表形式の項目の入力欄など、何らかの情報を記述できる箇所には、書式が定義されている
- ・書式を厳密に定義することにより、カードを編集するときに発生する表記揺れを排除することができる
- ・複数の人間が共同で編集する場合には、表記揺れはより発生しやすい
- ・選択肢形式の入力欄の場合は、入力したい単語に最も近い既存の単語で代替したり、意味を読み替えたりできないかを検討することが大切（情報の適度な抽象化）

カードについて

書式の詳細①

任意文字列

表現可能なすべての文字を含む文字列。連続する空白（半角・全角・タブを含む）・行頭空白・行末空白・改行も入力できる。

単数行文字列

改行以外の表現可能なすべての文字を含む文字列。連続する空白（半角・全角・タブを含む）・行頭空白・行末空白も入力できる。

正規化文字列

連続する空白（半角・全角・タブを含む）・行頭空白・行末空白・改行を含まない文字列。連続する空白は1文字の半角空白に変換され、行頭空白・行末空白・改行は削除される。

図 3-12 PMA 簡易マニュアル (21~24)

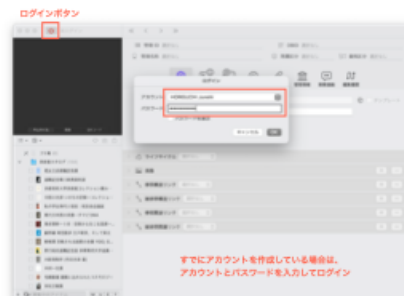
<p>カードについて 書式の詳細②</p> <p>タグ文字列 連続する空白（半角・全角・タブを含む）・行頭空白・行末空白・改行・半角カンマを含まない文字列。連続する空白は1文字の半角空白に変換され、行頭空白・行末空白・改行は削除される。半角カンマは、タグの区切りとして処理される。</p> <p>真偽値 0と1・真と偽・TRUEとFALSEなどを表す値</p> <p>32ビットバイナリ 32ビットの0と1からなる数</p>	<p>カードについて 書式の詳細③</p> <p>実数 小数点以下を含む数</p> <p>整数 小数点以下を含まない数</p> <p>UUID コンピュータ上で自動的に生成された唯一となる数</p> <p>URI コンピュータ上でのファイルやデータなどの格納場所を表す文字列</p>
<p>カードについて 書式の詳細④</p> <p>YYYY/MM/DD hh:mm:ss 4桁の西暦・2桁の月・2桁の日・24時間表記（0時起点）の2桁の時刻・2桁の分・2桁の秒で表す日時。すべて半角文字。</p> <p>Y/MM/DD hh:mm:ss 可変桁の西暦・2桁の月・2桁の日・24時間表記（0時起点）の2桁の時刻・2桁の分・2桁の秒で表す日時。すべて半角文字。不明項目は、桁数に応じて*を記入する。</p> <p>Y/MM/DD 可変桁の西暦・2桁の月・2桁の日で表す日付。すべて半角文字。不明項目は、桁数に応じて*を記入する。</p>	<p>カードについて 記述の方針①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カードには多くのグループや項目があるが、すべてを記述しないといけないわけではない ・書籍の情報を記述するときに継続時間を検討することに意味がないように、概念上存在しない項目には明示的に“概念なし”を設定することは有意義である ・上書き編集や共同編集を前提とした設計であるため、入力途中のカードを保存したり共有することは何ら問題がない ・入力途中であり、後日追記されることが望まれる項目には、“未入力”を設定する

図 3-13 PMA 簡易マニュアル (25～28)

アプリケーションとリポジトリ リポジトリとは

- ・リポジトリとは多数のカードを保管しておく倉庫のような場所
- ・通常リポジトリは、専用サーバ上に設置されており、複数のカードの記者者が同じリポジトリへアクセスすることができる
- ・リポジトリを介して、記者者同士でカードを共有したり共同編集することが可能となる
- ・リポジトリでは、カードのバージョンが追跡され、常に最新の情報を含んだカードにアクセスすることができる
- ・リポジトリにアクセスするには、専用サーバへのログインが必要

アプリケーションとリポジトリ サーバへのログイン



アプリケーションとリポジトリ アカウントの作成



アプリケーションとリポジトリ カードの管理登録



図 3-14 PMA 簡易マニュアル (29～32)

第3章 実施内容

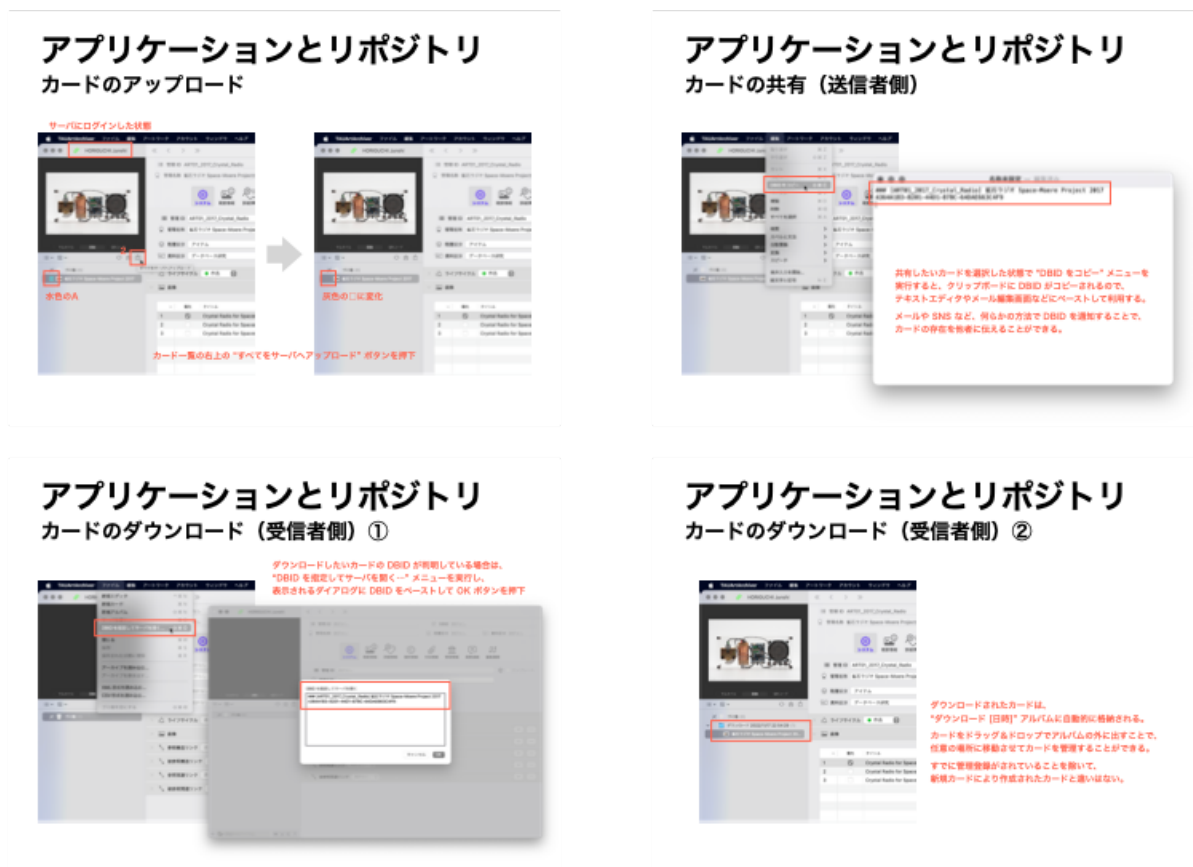


図 3-15 PMA 簡易マニュアル (33~36)

<h3>アプリケーションとリポジトリ</h3> <p>共同編集に向けて・・・</p>	<h3>追記</h3> <p>アプリケーションに関して</p>
<ul style="list-style-type: none">・ サーバへアップロードされたカードは、常に最新のバージョンが追跡され、各記述者の手元のバージョンと比較される・ 手元のバージョンと最新のバージョンの関係性により、カード一覧の左端の状態アイコンが N・A・M・U・C などに化する・ それぞれの状態に応じて、編集時の作業手順と注意点が少しずつ異なる・ 共同編集に関する具体的な手順は、アプリケーションに同封のユーザーマニュアルを参照	<ul style="list-style-type: none">・ エクセルなどの表計算ソフトウェアから書き出した CSV 形式のファイルを、あらかじめ定義した読み込み規則に従って、カードとして読み込む機能を搭載・ カードをサーバへアップロードして保管することができるが、個別のコンピュータの内部でアーカイブファイルとして書き出して、外部ディスクなどにバックアップすることも可能・ ユーザーインターフェース上の一部の機能は未実装です。今後拡張・改良を予定している部分があります・ TAUArtArchiver はオープンソースです！

図 3-16 PMA 簡易マニュアル (37～38)

3.4.4 ネットワーク構築に向けて

今回の PMA 試用バージョンの配布を通じて、本事業の目的である、1990 年代以降のインタラクティブ・メディア・インストール作品のアーカイブに関する議論を、具体的な形で一歩進められた。PMA はまず一義的には、メディアアート作品の（再）制作や（再）展示に必要な、テックライダーの記述、共有のための支援ツールである。技術情報のアーカイブ構築の必要性や意義については、既に十分に共有されているので、今後はそれぞれの組織がおかれた状況や、目指すべき方向性の差異に配慮して、ハイブリッドなネットワーク構築を進めていきたい。

そうした意味で、今後のネットワーク構築におけるキーパーソンは、作家というよりも、キュレーターやテクニカルスタッフである。ここ数十年で、様々なテクノロジーが身近になり、ICC や YCAM のような、経験値が高く様々なノウハウを有した組織だけでなく、一般の美術館や施設がメディアアートの歴史的作品を展示したいとの希望も増えつつある。そうした、新たにメディアアート作品の展示や再制作に関心を持ったキュレーターや、それをサポートするスタッフにとって、どのような情報やサポートが必要なのか。そうしたメディアアートの社会的な間口を広げていくためのネットワーク

第3章 実施内容

の構築を目指していきたい。そのときに、PMAのような、いわば制作者や展示側からの視点を含むアーカイブをどのように運用し、機能させていけばいいのか。本事業におけるネットワークは、限られた専門家によるネットワークではなく、様々な人に開かれた、オープンなネットワークでなければならない。多くの作品データを収集し、それらの公開に向けて作業する前に、PMAの設計と実装を様々な立場や視点からレビューしてもらい、より確実なものにし、ネットワーク構築の準備作業の中核として位置付けていきたいと考えている。

3.4.5 ネットワーク構築ヒアリング1：廣田 ふみ (CCBT)

開催日：令和5年11月13日

参加者：メディアアート分野担当：関口 敦仁、久保田 晃弘、野間 穰

ヒアリング対象者：廣田 ふみ

メディアアート分野にとって有効なネットワークを構築する目的として、東京都が2022年に立ち上げた「シビック・クリエイティブ・ベース東京 (CCBT)」に当初から関わり、プログラムディレクションを担当されている廣田ふみ氏のヒアリングを実施した。

廣田 ふみ氏プロフィール

IAMAS メディア文化センター、山口情報芸術センター (YCAM) を経て、2012年より文化庁でメディア芸術の振興施策に従事。文化庁メディア芸術祭及び海外・地方展開を含む事業を担当。2015年より国際交流基金で、日本と東南アジアの文化交流事業の一環としてメディア文化、メディアアートをテーマとした事業を企画。2020年より現職。東京都の文化施設が有する収蔵品等の文化資源をデジタル化し、多様な形態での鑑賞体験を提供する「TOKYO スマート・カルチャー・プロジェクト」等の立ち上げに参加。2022年には、渋谷のシビック・クリエイティブ・ベース東京 (CCBT) の開設に参画。

廣田氏ヒアリング概要

・CCBTについて

デジタルデザインアートラボとして、東京都の文化戦略に沿った形でデジタルアートの有効性をまとめた企画書を作成、コロナ禍という状況も重なり CCBT 設立につながった。

そもそもは東京都の美術館、博物館などのデータベースを作っている中で、デジタル環境や、機材などが脆弱 [ぜいじゃく] な施設の学芸員がデジタルコンテンツ、アートを扱いたいが、相談をするエンジニアなどにつながりがなく、企画立案が難しい現実をよく見かけたために、ラボスペース、工房スペースを持ちエンジニアがいる施設の必要性を感じて企画を行った。

実際に CCBT を立ち上げた後は CCBT で行っている催事だけでなくほかの美術館、博物館の活動の助けとなるような取組を行い、積極的に機材の提供なども行っている。

作品の制作、展示だけでなく、文化財のデジタル化などメディアアート関係者、技術者の経験と知識

第3章 実施内容

が活かせる取組についても考えている。

・岩井俊雄展について

岩井俊雄展で展示を行うために修復を行った作品は、CCBTでの展示のためだけに修復、展示を行った訳ではなく、東京都写真美術館で作品の収蔵の話があったが、そのためには修復をしなければ、現状の美術館での収蔵プロセスに乗せられないとの事情を知った上で企画、実施をしている。

・ダムタイプ LOVERS 修復について

ダムタイプ LOVERS 修復のときには、せんだいメディアテーク、国立国際美術館、京都市立芸術大学が協働して動くよう調整でき、実現できた。

岩井氏の事例、ダムタイプの事例は成功したが、なかなかこういった組合せが実現する機会が少なく、こういった組合せの実現をもっと増やしていきたい。具体的に言えば、作品の収蔵をしたい人と修復できる人のマッチングがもっと簡単にできると良いと考えている。

・メディア芸術祭について

メディア芸術祭で毎年展示が行われる結果、アーティストやインストーラーが集まって情報を共有、ディスカッションなどを行える定例のきっかけとなっていた。そういった機会としても有用だったと考えており、今後またそういった機会が持てる場の必要性も感じている。

・メディアアート史年表について

CCBTも掲載してもらえようであれば、情報を共有して是非掲載をしていただきたい。

・メディアアートのネットワークについて

全国の公立美術館などを調べれば、メディアアート作品を展示したいと考えている人はたくさんいるはず。とりあえずパッケージ化されているようなインタラクティブ作品を扱った展覧会などは実施できているが、それ以外の作品を展示したいと考えているが実現する方法が分からない学芸員もいると思う。そういった人の困りごとを引き受けられればとても有効だと思う。

3.4.6 ネットワーク構築ヒアリング1：黒澤 浩美（金沢 21 世紀美術館）

開催日：令和6年1月5日

参加者：メディアアート分野担当：関口 敦仁、久保田 晃弘、野間 穰

ヒアリング対象者：黒澤 浩美

メディアアート分野にとって有効なネットワークを構築する目的として、水戸芸術館、草月美術館を経て、現代美術を扱う美術館として国内外で有名な金沢 21 世紀美術館に準備室から参加、長年にわたり同館のキュレーターとして多数の展示や収蔵に関わられてきた黒澤浩美氏にヒアリングを実施した。

第3章 実施内容

黒澤 浩美氏プロフィール

ボストン大学（マサチューセッツ州、アメリカ合衆国）卒業後、水戸芸術館（茨城）、草月美術館（東京）を経て2003年金沢21世紀美術館建設準備室に参加。建築、コミッションワークの企画設置に関わる。2004年の開館記念展以降、多数の展覧会を企画。「オラファー・エリアソン」「ス・ドホ」「フィオナ・タン」「ジャネット・カーディフ&ジョージ・ビュレス・ミラー」など、国内外で活躍する現代美術作家と作品を紹介。ミュージアム・コレクションの選定や学校連携や幅広い年齢の来館者に向けた教育普及プログラムも企画実施。2011年 City Net Asia（ソウル、韓国）、2017年 OpenArt（エレブロ、スウェーデン）、2018年東アジア文化都市（金沢）で総合キュレーターを務める。

黒澤氏ヒアリング概要

・メディアアートについて

金沢21世紀美術館で統一した見解を持っているとは言い切れないが、現代美術という大きなレンジの中で、これは彫刻、これは絵画、これは何という中にメディアアートというジャンルを区別はしていない。どんな技術を使っていようと、例えば映像ぐらいまでの分類、あるいは映像インスタレーションぐらいまでの分類しかしておらず、ビデオとデジタル、初期のビデオアートと、デジタル化された後の映像作品との区別すら余り細かくはしていない。その理由には、技術は進化していきだろうという見込みがあり、アーカイブしていく段階で、その技術の進歩に合わせて作品をコレクションしている訳ではない。

・金沢21世紀美術館のコレクション方針について

1980年代以降の作品をコレクションするという方針があり、ジャンルごと、あるいはジャンルを通史で見るといったこともなく、どちらかというところ一般社会の様々な事象、現象に合わせて、それを背景にして、これが作品として重要だろうというものをコレクションする前提がある。

映像作品などはオリジナル、コピーの問題もあり、どうしても持たなければならない、フィジカルに収蔵しなければならないと考えられる作品の優先順位が高くなる。誰かが持っているのであれば、21世紀美術館が収蔵すべき作品からは遠くなる。さらに、コピーが作られるであろう、あるいはコピーがどこかにあるであろう作品には、今はほぼ手をつけない方針を決めている。

・メディアアート作品の収蔵について

メディアや機材、絵の具や粘土ではないもの、ブラウン管なりを使ったいわゆる技術的なものが必要と部分的にでもされている作品に関しては、扱いに実績のある ICC、YCAM がコレクションできるのであればそれが良いのではという議論もある。

第3章 実施内容

・作品の保存、再展示について

コンサベーションのジャンルで引き合いに出される、例えばナム・ジュン・パイクみたいな作家がいる、フィジカルにその物質自体が作品の一部を成しているケースと、本当にデータの再現だけで済むというものは、切り分けて考えている。前者のナム・ジュン・パイクのような作品の場合、そのもの自体の扱い、それからそのもの自体の保管、そのもの自体がどれだけ長く延命できるか、あるいはなくなったり壊れたりした場合どうやって修理するのか、どこまで手をつけて良いのか、これ以上やったらオリジナルが損なわれるといったボーダーが問題になる。今までの作家も100年、1,000年残すことを真剣に捉えていなかった時代には記録も残っていなかったりするので、再展示あるいは展示のときに関係者からできるだけ聞き取りを行い、調書に残していく作業がギリギリ私たちのできる範囲ではないかと考えている。

・メディアアートのネットワークについて

例えばこのサイズのこの型番のこのモニターでなければならないという映像作品があり、それはもう替えがない。ではこれを再展示して壊れたらどうするか、壊れたら誰に修理を頼んだらいいのかが、技術畑にいる人たちの間では情報共有していると思われるが、美術館は伝手[つて]を頼っていくしかなく、公開されている情報がない以上、手をつけられなくなってしまう問題もある。

アーティストや技術者が、情報をオープンソース化するところまでやってくれれば、ミュージアムとしてはすごく助かる。

ミュージアムも作品自体を保存するというよりは、その作品を再現するためのスペックのデータがどこかに保管されていて、そこにアクセスできさえすれば、各ミュージアムが持つ必要はないので、アーカイブの中に作品情報と、スペックの情報が一緒に入っているのが理想的だと考える。

最近の展示においても作家が指定する機材を持っていない場合にすごく困るケースがあった。美術館は貴重な機材として保有している場合が多く、他の美術館へ機材単位での貸出しをしない場合が多い。最終的には多摩美術大学から機材を借りられたため非常に助かり、このようなつながりも重要と感じられた事例だった。

・作品の記録、記述について

どこのアートセンター、美術館も少数でやっているのだから、なかなか完璧なデータを整備しながら展示公開するのは難しい。実現できるかは分からないが作品に関する情報整備を目的とした展覧会を実施してしまうのは良いと思う。

・メディアアート史年表について

こういった作品、催事があったなと思い起こせて、通史で見せられるほどにたくさんの作家や作品がある事実に感動もあった。ここから若い人たちに見ていただくべき作品を見ていただけるような機会があるのが良いと思う。

第3章 実施内容

3.4.7 ネットワーク構築ヒアリング1：南条 史生 (N&A)

開催日：令和6年1月16日

参加者：メディアアート分野担当：関口 敦仁、久保田 晃弘、野間 穰

ヒアリング対象者：南条 史生

メディアアート分野にとって有効なネットワークを構築する目的として、現代美術に関連する様々な展覧会の企画から審査員などを歴任、多数の美術館の立ち上げから運営にも関わりメディアアートにも造詣の深い南条氏にヒアリングを行った。

南条 史生プロフィール

1949年東京生まれ。1972年慶應義塾大学経済学部、1977年文学部哲学科美学美術史学専攻卒業。1978～1986年国際交流基金を経て1986～1990年ICAナゴヤディレクター。1990年ナンジョウアンドアソシエイツ株式会社（現 エヌ・アンド・エー株式会社）設立。2002年森美術館開設に副館長として参画。2006年11月～2019年同館館長、2020年より特別顧問。同年より十和田市現代美術館総合アドバイザー、弘前れんが倉庫美術館特別館長補佐、2023年5月よりアーツ前橋特別館長。

国際的な展覧会、審査員の経験として、ヴェニス・ビエンナーレ日本館（1997年）及び台北ビエンナーレ（1998年）のコミッショナー、ターナー・プライズ審査委員（ロンドン、1998年）、横浜トリエンナーレ（2001年）、シンガポール・ビエンナーレ（2006年、2008年）アーティスティック・ディレクター、茨城県北芸術祭（2016年）総合ディレクター、ホノルル・ビエンナーレ（2017年）キュラトリアル・ディレクター、北九州未来創造芸術祭-ART for SDGs-（2021年）ディレクター等を歴任。著書に「美術から都市へ～インディペンデントキュレーター15年の軌跡～」(鹿島出版会、1997年)、「疾走するアジア～現代美術の今を見る～」(美術年鑑社、2010年)、「アートを生きる」(角川書店、2012年)がある。

南条氏ヒアリング概要

- ・メディアアート作品の修復、再展示について

メディアを使った作品をもう一度再現しようとした場合には、やはりその作品の技術情報を知っている人がいる状況が一番大きい。最初に作るときには当然、そういった知識の人がいて製作となるが、再製作の場合には最初に作った人がいない場合もあるので、情報の記述がやはり重要である。そうすると1990年代などの作品に関しては、作家や技術者本人がいるうちにアーカイブをしておく必要がある。

- ・メディアアート史年表、メディア芸術データベースについて

ここまでのものができたのであれば、こういったものをミックスさせ相乗効果で発展を図るのが重要だと思う。実際のアーカイブや展示、研究などに発展させていかなければならないと思う。当然そ

第3章 実施内容

ういった展開を進めるには、そういった声が多く上がり機運を醸成していくことも必要になると思う。

・日本の芸術に関する現状について

日本は美術館が多いと思われがちだが非常に少ない。東京だけ見てもパリ、ロンドン、ニューヨークと比べても非常に少ない。加えて専門に特化したデザインミュージアム、建築ミュージアム、テキスタイルミュージアムも全く少ないと思うので、これから特化した施設ができていっても全然おかしくないと考えている。メディアアートの美術館があっても良いと思うし、他のメディア芸術の施設がもっとあっても非常に良いと思う。

例えば知り合いの外国人が日本に来るときに、日本のマンガ、アニメを好きな人も多くて、どこに行けば良いかとよく聞かれるが薦められる場所が少なすぎるといつも思っている。

海外での日本のメディア芸術に関する人気に比べて、日本からの国際的なマーケットに対する取組が少ないと思う。

もう一つの問題として、美術館などが新設された場合、立ち上げのときに一番予算があることが多いと感じる。できたもの、作ったものを発展させていくのが大事なので、そういった運営ができるようにしていくべきだと思う。海外では美術館など良い形で運営をしていけば、所蔵品が増えるのは当然なので、収蔵庫や新館の新設はよくある。日本でもそのような発展ができるようになると良いと思う。

ただこういった問題に関しても説明をし周知していく必要があると思う。

既存の美術館などにおいても Wifi のような基本的な環境も整っていない場所も多い。海外ではテクニカルチームを抱えている施設も多くあり、そういった部分でも差を感じている。

・関わった企画、事業などの記録について

名古屋で行われていた ARTEC や海外の科学館などの展示、そのほか多くの展覧会などに関わってきたが資料や記録などが無いものも多くある。こういった状況も残しておかなければと考え、自分でアーカイブを行っている件もあるが何もできていない件も多くある。

メディアアート関連の作品で言えば、例えば横浜トリエンナーレのような大きな催事にも多くの重要な作品が展覧されている。そういった作品に関しても、記録を残しておかなければ分からなくなってしまう場合もたくさんあると思う。

・メディアアートの振興について

他のメディア芸術、マンガ、アニメ、ゲームのように産業として成り立っている分野との違いを意識する必要があると思う。例えばアルスエレクトロニカにはスタートアップのビルも建っている。メディアアートから出てくようないろいろな実験の中に、ビジネスの種があるような場合もあると思う。そういった種をきちんと拾えるような構造作りも妥当だと思う。そういうことがきちんと進んでいけば、独立したメディアアートのセンター作りも十分に成立すると思う。

第3章 実施内容

- ・メディア芸術のアーカイブについて

現に起こっている現象を全て引き取っていくべきであると考え。アーカイブされたものに対する評価は20年後、30年後に出てくるものであって今判断できるものではないと考えている。

- ・アーツ前橋での事例

前橋市、仙台市、名古屋市で社会問題をデジタルトランスフォーメーションで解決するという取組にアーツ前橋で参画している。これにはメディアアートが大きく関わっている。こういった取組に関わっている技術系の博士が揃 [そろ] っているシンクタンクのような会社でも美術系大学の出身者を多く雇用している。技術的、テクニカルなものを実装していくに当たってもクリエイティブや哲学、デザインなどに強い人と協働していくようになっている。こういった部分にもメディアアートにはチャンスが多くあると思う。

本報告書は、文化庁の委託業務として、大日本印刷株式会社が実施した令和5年度「メディア芸術連携基盤等整備推進事業 分野別強化事業」の成果をとりまとめたものであり、第三者による著作物が含まれています。
転載複製等に関する問い合わせは、文化庁にご連絡ください。